



074772-000-1

特43-709

演劇新報

駸々堂

M17

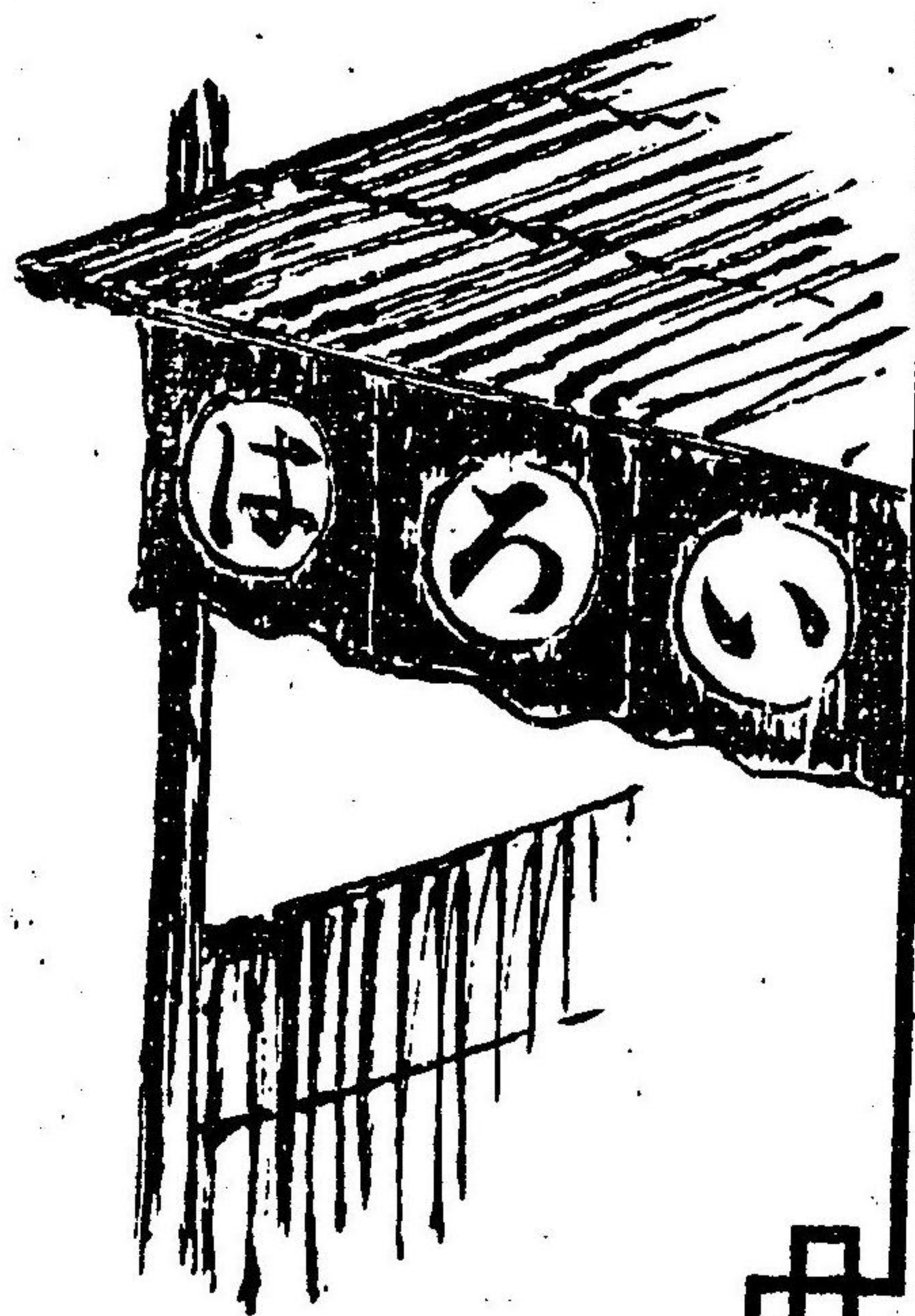
CEK-0070



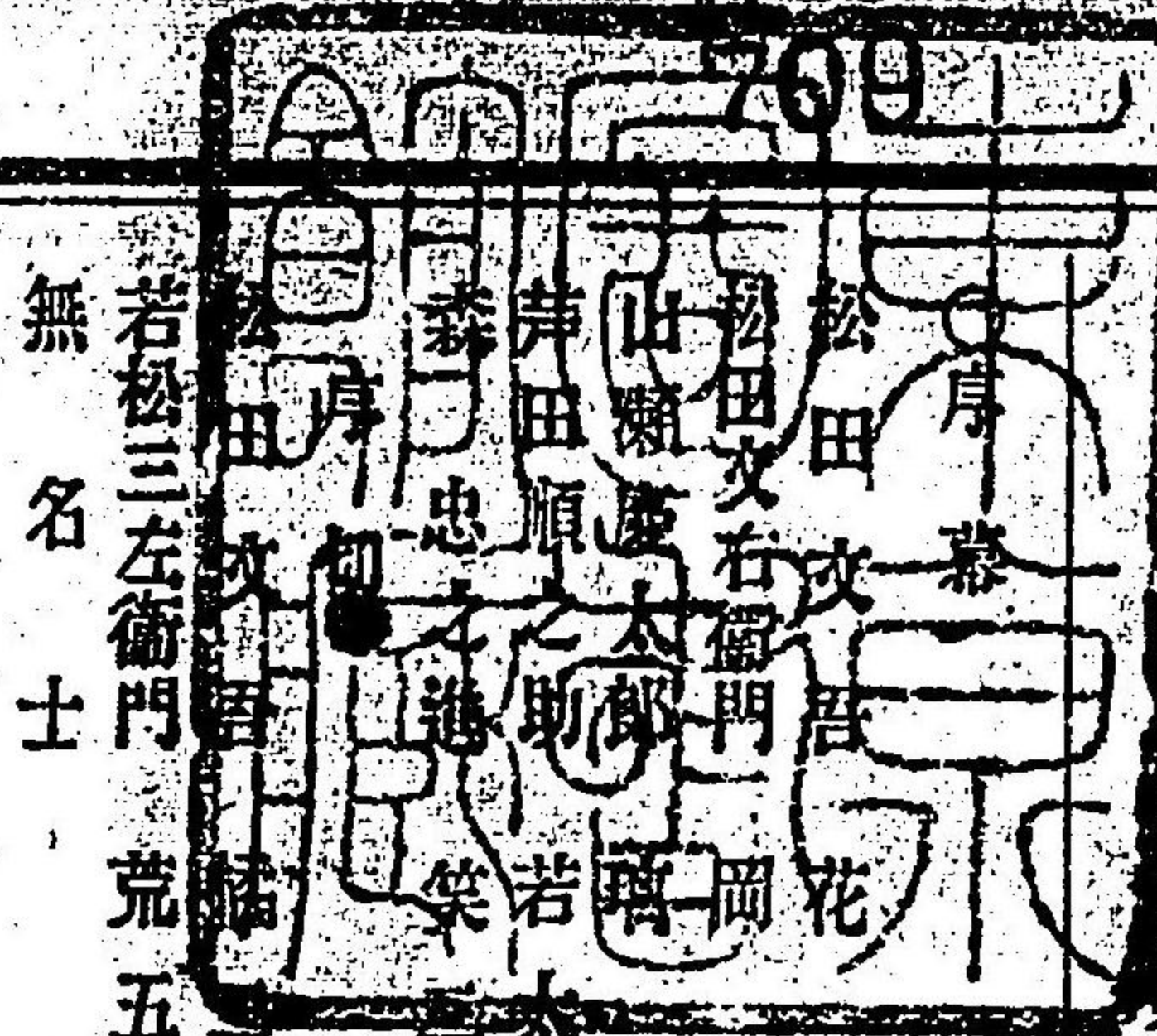
序詞

演劇の根本と世に稱へらるる吾大阪の  
して是に關する雜誌なきの一の欠事な  
りと平素遺憾の事と思ひとりしが這回幸  
ひよ京阪の更なり東京及各地諸名家達の  
補助と得るの便宜と得られ俄に發起し  
て此演劇新報を刊行す事といふありぬ本号

紙數の都合より依り止事なや戎坐當狂言筋書二葉松とのと讀切又掲載それと第二号より豫て諸新聞に廣告せる如く新作の狂言小説及び議論説話奇書等其種々演劇に關する事項を掲げ一の務て看客諸君の目と歡べしめ一の勉て演劇社會の改良を事とそれを下し圖するいろは茶屋のいろもほひも薄けれと左に記る二葉松の幾未長くとさりかきはお引立あらん事をと版元駿々堂の主人に代て戯場一狂生宇田川文海敬白



演劇新報第一号狂言役割姓名録



○二幕目  
宮津左京 延 若  
常盤樓五助 鶴 助  
親則娘妙子 璃 寛  
大領重信 宗十郎  
松田文吾 橘三郎

若黨復市 同人  
青山小三郎 延三郎  
左京妻竹川 橘三郎  
同娘文子 芦三郎  
親晴妹お房 松太郎  
寺内親則 鴈正  
同親晴 新四郎  
腰元お國 新四郎  
金子又市 朝太郎  
神谷曾平治 佐十郎  
石川仁右衛門 大喜五郎  
辻番人六兵衛 岡助  
続の三太 璃寛  
若松三左衛門 荒五郎

○三幕目  
若松三左衛門 荒五郎  
松田文吾 橘三郎

○四幕目  
大領重信 宗十郎  
青山小三郎 延三郎  
船田新七 荒太郎  
大江幸七 琥珀郎  
宮津左京 延若

○五幕目  
大領重信 宗十郎

女六部妙子 璃 寛  
 實の寺内妙子  
 松田文吾 橘三郎  
 髪結吉之助 延三郎  
 實の青山小三郎  
 杉山宮内 太三郎  
 宮内娘お綾 芦 鴈  
 實の左京娘文子  
 青山小次郎 璃 笑  
 船田新七 荒太郎  
 大江幸七 琥珀郎  
 金子又市 朝太郎  
 石川仁右衛門 太喜五郎  
 見取ノ松五郎 鴈 若  
 小柴復市 橘三郎  
 若松三左衛門 荒五郎

娘文子 芦 鴈  
 合長家 松 朝太郎  
 家主六兵衛 太喜五郎  
 三太女房千代 松太郎  
 続の三太 璃 寛  
 ○七幕目  
 皺の三太 璃 寛  
 仲居お梅 同人  
 實の寺内妙子  
 松田文吾 橘三郎  
 杉山宮内 太三郎  
 藝子綾吉 芦 鴈  
 實の娘文子  
 船田新七 荒太郎  
 大江幸七 琥珀郎  
 青山小次郎 璃 笑  
 常盤樓五助 鶴 助

○九幕目  
 宮津左京 延 若  
 藩主重信 宗十郎  
 寺内妙子 璃 寛  
 小柴復市 橘三郎  
 青山小三郎 延三郎  
 同小次郎 璃 笑  
 小林 薫 鶴 助  
 左京娘文子 芦 鴈  
 住職禪師 新四郎  
 若松三左衛門 荒五郎

演劇新報

當夷座二の替筋書 勝能進報

輝く朝日の勤王の名義よ  
 佐幕の非論を懸りして  
 一家万世不易の業へ

わかみどり ふたば  
 若緑二葉の松

まれば劇場の脚色も移して

看客の千代見草根譯の本

○序幕 伏水京橋の場 舞臺の造物の平舞臺上手の橋の出かけ正面は葎張の出茶屋

(大序) 伏水京橋の場 舞臺の造物の平舞臺上手の橋の出かけ正面は葎張の出茶屋  
 の仕舞跡下手の柵矢來傍の柳の立木空より同トく釣枝都て伏水京橋の体へコペン太鼓  
 浪の音あて幕明(旅人)申々一寸物が尋ねぬい何處へまいつたふ三十石の船がおさりや  
 且(船頭)ハ、アお前方の旅の衆と見ゆるが今度の騒動のまど知らぬり知らぬと大阪通  
 ひの船處であく何でもお上りゑる騒動長州様の疑ひが晴て入京とゆるされさ上急  
 のお召其上將軍職が廢となり守護職の赤松様又所司代の何とく様も職を放たき入京  
 おさしとめとなつて京も居るをぞ夫故今度の大騒動となつたが今もまちらへ戦争

が舞込りも知ぬと咄しの内又どんちやんとげしく成る皆々捨せりふよて上下へ別きて這入る跡どんちやんとさくとなり向ふより加藤十太夫宇田川平八戸田三郎兵衛間部勝太郎荒尾平八郎森忠の進皆々手紙を白布よて結び鎗抜刀と持走り出で花道に留り(十)何といづきも鳥羽伏水兩道の合戦一時に起り我々ども云及む(平)諸隊の面く爰を先途と働けども(三)味方の大軍敵の小勢に切立ち(勝)所々の埋伏竹村よての挾討(荒)敵の手立は落入て味方の死亡其數知れぬ(忠)鳥羽街道の手敗走なし(平)勢定へ引退く(十)夫故是へ参りし敵の備への後へ廻り(平)不意に討んず我々共必ず共におぬかりめさるかと六人舞臺へ來る此時上手より京方の待六人やとり戦争の拵よて來り關東方の者と謎の鳴物よて双方入亂立まどりよろしく有て此道具返し。造物平舞臺後ろ黒幕所々松の立樹下植込數疊松の釣枝上手よ疊四五疊と橋となし京方の侍六人鑊炮を持疊の影より狙ふ此上手よ若田順の助隊長の拵よて差圖の旗と持指揮す戸家の口よ關東方の兵士六人程出て鑊炮を舞臺へ向け双方炮戰の模様都て淀堤戦争の体此見得鑊炮の音鯨の聲へコペン太鼓よて道具納る(順)如何も旁々斯く炮戰よて時

を移さバ敵の大軍味方の小勢終よゆしき大事よ到らん手元へ切入り勝敗を決せん進めやいづれも(六人)心得まーと順の助をはトめ六人共刀を抜て關東方と追ふ是よて關東方戸家へ逃込む右の鳴物をさくよて橋掛りより松田文左衛門上手より山瀬慶太郎好その拵いづきも抜刀よて舞臺へ行合(慶)貴殿の松田文左衛門どの(文)左いふ山瀬慶太郎どの(慶)松田どののよ手と負せし(文)サ、此度の合戦の我君生涯の御大事悴文吾と共々に手痛く働さ候へどもいひがひかくも味方の放走斯くなる上の關東の勝利思ひもよらぬ我の討死致さん覺悟シテ、悴文吾よ貴殿お出合のなされぬうと苦痛のこあしめていふ(慶)如何も御子息文吾どのの鳥羽細手よて共々敵軍へ切入て互に分骨さい身なせし何を申も亂軍故其儘姿を見失ひ一が武勇強氣の文吾どのいづきも一方を切開御身と尋ね参るの必定必らず御心配の召さるかと此所よて兩人別る同トくどんちやんよて京方關東方の戦勢の裏切と見せ大亂となつて終よ關東方と追ふて橋掛りへ這入又さくよて向ふより松田文吾着込義經袴白の後鉢巻關東武士の拵よて抜刀戦争に勞をたるよあしにて跡先を伺ひなり舞臺へ來て

(文)淀橋本の亂軍にて多勢の中へ取込らる切抜となしたる折親人の姿をば見失ひて  
 お行衛門の御老年とい申なりら御氣丈夫なる性賢故中々敵に討るべし御方にてり  
 あらざれども敵勢ひ盛んあれは安心のあしがたし首尾よく落延給ひし御姿を見さ  
 る内の何にしてみ心掛りア、どう早ふお目に掛り安心としたいものじやないどわ  
 りへこきしあつて上手へ行ふととる此内又どんちやんにて京方の侍六人皆々文吾に打  
 てかゝる是より鳴物にあり六人と相手に立まどりよろしくわつて淺黄幕返し。造物二  
 重草土堤の蹴込二重の真中に雨覆としたる臺石附の石地藏後一面に塔婆と結び込し敷  
 疊都て伏見六地藏の模様の鐘浪の音鼓めて遠寄の鳴物にて道具納る向ふより以前の  
 松田文吾大旦那の拵にて所々薄手と負しましにて血染たる陣羽織と切首と包  
 る是を抱へ跡先を見廻しながら出で來り(文)親人を尋んど所々方々を見めぐる折りし  
 も又候敵も取囲まれ右往左往と切拂ひ其場を遁き親人は御行先を尋しよ計らばお目よ  
 りかゝりしるを銃丸は爲し討を給ひとらさく討死なし給ふとあかしわつて何の志を  
 父の首級を何さへる仮埋なし此身も共に死出のお供そふとくと同ト合方にて舞臺へ

來り(文)ヲ、幸ひの地藏尊遊縁のら暫時なりとも此所に御首を備へ一遍の回向をな  
 さんと陣羽織の内より切首を出し前なる小流にて首を洗ひ地藏尊の臺石の上に置(文)  
 ハ、ツ父尊靈に申上奉る最前御討死の今際の御遺訓我の此所に置て一命と捨三百年  
 の御恩澤に報ゆれば汝の我此首を携へ此場を切抜末長く猶も忠勤をとげむべく父の三  
 途の供せんなど早まりて犬死致さど理せめての仰せあれは是非もさく御首を  
 勿体なくも手早く掻切辛くも一方の血路と開き此所迄の落延しが既に一戦に敗れ  
 かし朝敵の名さへ帯たればいつまで生かぶらへ主家の滅亡を目のあたりに見て猶更  
 に愛恥とささんより今日是にて貴卿の死出の御供をし死する覺悟に極め候今際の仰  
 と背き候不孝の至りに候へども何卒御免し給われし南無や六道能化の地藏尊我等親  
 子と導きて極樂往生ささしめ給へ南無阿彌陀佛くと地藏尊と拜し臺石に腰よりけて  
 短刀と抜く此前に上手の方敷疊のうげより若松三左衛門着込好しの鎧下義經袴とらじ  
 大小の拵へ陣羽織にて陣笠と冠り様子と伺ひ居る文吾の短刀を持かへ目と閉て我腹へ  
 突立んとさす時(三)早まり給ふ先々待きよと短刀と持し其手を押へる(文)我割腹を

止め給ふ(三)サ、某一言其許へ申入るべき一義あり必ず大死をめざるを止る(文)  
 決心定めし切腹を大死とい何をもつて(三)サ、夫又附て其の申次第を心を鎮めどく  
 と聞きよ侍(文)ナ、何んとトよきを詭の合方になり(三)斯申拙者事も倍臣ながら主  
 君と俱に將軍家の御恩澤を蒙るもの今日幕府大敗をなすとも三百年の舊恩に報ゆる  
 心厚ふかし仮令如何なる障りあるとも藩論を佐幕に一致し再び幕府の威をのりやうす  
 目的の候へば暫く其に御身の命をお預めつて盡力をなして給ひ必らず早る時にど  
 さらぬとくく思慮をめぐらされよといふ(文)左程迄に拙者めをお諫くごさる其許様  
 (三)主君の御名の此處にてわらさまに申されねど某事の若松三左衛門と申者一  
 家の政事も預る拙者御合点の参りあへば身が邸宅へ伴ひ申御身の上の某が誓つて隠まひ  
 申でおさらふ(文)スリヤ拙者めと夫程迄に(三)夫も見所おさる故強て死とばかり止め申  
 (文)ム、命惜しむにあらざれども舊恩報ふの目的ありと仰るるの拙者の心に(三)落  
 入しと申さるるか(文)如何にも(三)イヤ忝しく聞入給ふ上から又密談の邸に於  
 て(文)其御深意の仰に従ひ(三)決心あるをすこしも早ふ(文)心得申されども父が首

級と此儘(三)如何様夫も御尤もム、幸ひ地藏の此ほどりへ仮埋かして重て野送り(文)  
 何様左様致でござらふと此時月隠る三左衛門文吾の兩人の切首を持前へ出る此時上手  
 の若原を押ひけ同じを戦争の形りの侍後る鉢巻筒袖の着附着込輕さん大小はらじり  
 しき形にてツカくど兩人の中へ割つて這入首へ手と掛る是にて兩人の驚き切首と下  
 に置き双方へ別れ三人急度見得是にて黒幕と切つて落す向ふ在体の中遠見にある是よ  
 り三人切首とかせにさぐり合の立廻りいろく有つてト文吾の切首と取上る三左衛  
 門文吾も咄き兩人のがれて花道へ行侍の向ふをすのし見て(侍)正しく落人ト三左衛  
 門の手早く小石を拾ひ(三)エイト舞臺へ打侍は身をうはし足をふみだす花道の兩人  
 は入り替る是を見合せて木のかしら(三)おされと先お立文吾附て足早向ふへ這入る侍  
 は跡を見送つて此仕組早めたる合方うすめてヘコペン太鼓おてよろしく柏子幕  
 ○二幕目 殿中議論の場 城外親則殺しの場 奥庭妙子捕物の場 造物平舞臺見附  
 け一面の金襴大欄間とおろし橋掛り戸家口共金襴の見切り都て大廣間の体爰よ若野藤  
 兵衛尾形傳七郎栗川紋彌櫻井清六下手よ金子又市神谷惣平次石川仁右衛門服部周馬い

づれも巽斗目麻上下の拵にて双方詰かけて居る此見得にて幕明(若)スリヤ如何様も申共若松三左衛門との異見と心(尾)各々非論と(四人)仰らるる(金)如何も宮津左京どの勤王論こそ理の當然いので理と捨(四人)非と取んや(若)さうかいやれと(四人)刀よりけても(神)其手と我々(四人)相待ふや(皆々)何と(双方)刀とつて急度なる此時奥よて(藩主)アイや旁々争ひ無用静まれ(石)アノお聲の我君さま(皆々)ハ、ハア、と双方へ叩て平伏する是と時計の音よて奥より藩主羽織袴の拵へ小性刀と持附添出で来り藩主真中よりすゑたる櫛の上よりすぬる(藩)如何も旁々(皆々)ハ、ハア、と三味線入序の舞になり(藩)去年十月廿四日徳川慶喜公其職と辭てより一藩の人心勤王佐幕の両黨に別れ議論紛々たりしが當月三日伏水の戦争に關東勢敗とどり慶喜公東に走るより愈々議論甚しく一藩の諸士黨派と貫んと欲す依て今日其順袖たる若松三左衛門宮津左京と召出しいづれが是なるや又ハ非なるや一應異見と承り方向と定めんと存する予が未だ着坐も待たずして争論の兪忽のいより予へ對しても無禮ならずや(若)ハ、ア君の御阿り恐入ていござりますれども慶喜公關東に走り今朝敵の汚名と蒙

り給ふ事我々歎き思ふ所も候(尾)其根本と尋ねれば錦旗は炮發致せしとの申なから是止と得ざる都合よして眞の朝敵賊臣との申難し(栗)左をいこそ日頃賢明の聞ある執權若松三左衛門どの佐幕の論と述て君と始諸士と論し給ふのも我君知ろし召るる如く(櫻)三百年來弓の袋太刀の鞘は納まりし世の太平の徳川神君家康公の我徳よして天下の諸侯悉く其恩澤は預らざるものなし況や當家は於ておや其分家として本家は敵とふ(四人)いどれのあらんや(金)夫が則ち御老職三左衛門どの心得違と申もの夫と各々賛成せられ君と感へし給ふの當家の破滅と望むとふもの(神)抑天下の一人の天下のあらんや天下の人の天下よて草も木も皆大君の物ならせや(石)然るも天下の人將軍あると知つて都の君の有ると知らず故は雷山陽深く歎て道と糺せり(服)依て人の人たる物の皆勤王よ心と傾け今日の義に至りしも元へとへ徳川家の政道正しからざるより世の斯く成しと申もの左すれば自業(四人)自得ならずや(若)スリヤ各々よ一門支流乃義と思はず(尾)宮津どの勤王論と飽まで賛成(四人)せらるるよか(金)如何も其道は隨ひ道と守るが武門の習ひ何私しと(四人)論せんや(若)シテ其私しと(四

人)云るゝ(金)若松どの(四人)佐幕論(若)イヤ宮津どの(勤王論)道よかげた  
 る(四人)非論でおさる(金四人)コリヤ聞所いざ聞ん(若四人)チ、いどいでハト屹度息  
 込む此時向ふよて三左衛門(三)アイヤ各々先待れよ其義ならバ當家の老臣若松三左衛  
 門申述ん(若)何三左衛門どの(皆々)出仕とやと是と早舞より向ふより若松三左衛門  
 尉斗目麻上下の拵よて刀と提げツカカ〜出て(三)ハ、ッお召よ隨ひ若松三左衛門只  
 今出仕仕つておさります(藩)チ、三左衛門う今日の出仕大義も存する近う〜とみ  
 れより藩主の勤王佐幕の両説區々よしていづれとつていづれと捨んと若松の論と聞  
 んと三左衛門は問へバ三左衛門の恐ながらと其趣意と述べ飯令宮津左京如何程の利害  
 と述べ道理と證して勤王順主の説と解くとも俗風なり次第襟元も附小人婦人の卑さ  
 趣意よて君子の採ざる處なり杯さん〜左京の非論と並ぶる此時(左)アイヤ暫く三左  
 衛門どの暫く〜お待下されと早舞よて向ふより宮津左京尉斗目麻上下の拵にてツ  
 カ〜と出で來り花道の下に居る(金)貴殿の宮津(皆々)左京どの(藩)只今出仕致せし  
 か(左)ハ、ア君のお召よ取あへせ只今出仕致せし所若松どの〜お詞余り聞憎くらん

せ一故御前とも憚らず失禮の高聲眞  
 平御免下さりませう(三)某が言葉  
 が貴殿のお耳に障りしと(左)如何  
 にも耳に障りましたとまれより本舞  
 臺にかゝり(左)何が故に拙者の論の  
 君子の取らざる所でおさる(三)貴殿  
 それと御存じない(左)もるにも  
 てお尋す(三)御存かくバヤさうり  
 か(左)承りた(三)君にもお聞下  
 されたし左京どのケ様でおさるとみ  
 れより徳川の徳をあげ非と理に曲げ  
 ていひとらんとすれと左京の正論其  
 威に恐れず利害得失も〜に論じ





ト若松三左衛門といひ伏る其時三左衛門のいひ負て言葉なされば藩主とはトめ列座の人々皆勤王乃説に隨ひ今より頑愚論と廢して一番力と勤王に盡と渡りせりふに皆々へ渡る(藩)然しながら三左衛門其方の論行れどとて必らず共に不平と抱き遺恨と残す事なかれ今日の例年諸初の日なれども當今世の中おだやかならば依て今年に義式と畧し醫師寺内親晴が推舉にて目通と免したる妙子といへる醫師親則が娘とはトめ予が手廻りの女原に今様の歌舞となさしめ聊義式の眞似方と致さんと役向の者に於て附用意調へ置たれば其方等も一見なし此程よりの勞とも忘れ且今日の議論に相互ひに遺恨とさし挾まざるや予が益と取らずであらふ三左衛門にも同道しやれ(三)ハア君命 忝 あくのおさりますれと拙者服痛におさりますれ(藩)何服痛とあ夫も持論の行をぬ心あしさにあらざる(三)中々もつて宮津どのの確論正義と心苦しうぞんじませうや(左)夫も偏に君家のお爲とぞんずるゆゑに某如き愚味の身と願ず貴殿へ對して面てと犯し(三)言ひ争ひし某も君家のおためと存せしなれと君御採用のあらざれば今詮さき拙者が議論(左)何に致せ其所許への不禮の段の某より(三)イヤ拙者より

お詫致す(左)只此上の相變らざる(三)別懇にヤ(二人)談ずるでござらうと是と時計の音になる(金)アリヤ最早申の下一刻我君にの奥殿へお入り有て(神)今日お催しの今様御見覽と皆々渡りせりふにて藩主とはじめ左京皆々奥へ這入此時橋掛りより前幕の松田文吾(文)三左衛門との無御無念におさりませう(三)左いふ貴殿の松田氏御介惜のお願ひ申と刀と振り切腹仕様とする文吾胸りして其手と押へ這り若松氏にの刀に手とかけ何と召るぞ(三)何とも致さぬ此場と去らず切腹致す拙者か心底(文)スリヤ反對黨の順袖たる宮津左京に持論とべいひ破られしと遺恨に思ひあふら命と捨召る(三)スリヤ其所許にの此場の様子と(文)如何にもお次で承つ(三)何と言ふと合方になり是より文吾が伏水で救われぬ事此場の様子と聞たる一伍一什といひいでト三左衛門が死を止めし上たつて用ひざるより止む事を得ず其身も俱に切復せんとする心底と見(三)スリヤ善悪ともに此三左衛門に隨身召る(文)御念に及む御覽の如く最期の俱に致さん心底(三)さうと左様(文)人の誠の死ぬより外におざらぬといと又死ふとそるを三左衛門留て(三)イヤ其御覺悟にの及びやさぬ拙者も死の止りや(文)スリヤ

貴殿に、某が諫めを用ひて御自害を(三)如何にも貴殿の意見に随ひ猶も持論を主張  
 なし夫で行ざる其時の反對黨の奴原はトめ品によらば某しが思案を定めし義もござる  
 (文)シテ其御思案と仰らるゝ(三)高ふのいわれぬ密事の極意と文吾に呷く文吾恠り  
 して(文)エ、スリヤ殿の御一命と(三)コレと兩人透りへ思入此時後ろにて今様の始  
 りと呼ぶ(三)アリヤ最早今様の始り幸ひ今日奥へ召れし妙子といへる女を偽り我手を  
 濡さず殿の一命(文)そりや又余り(三)ハテ善惡共に三左衛門に(文)ヤトきつくりする  
 三左衛門の扇と下に置(三)御隨身でりおざらぬりと思入あつていふ文吾のあされしま  
 かしにてぞつとなる此模様早舞にて返し。造物平舞臺一面に城の石垣真中に敷臺附の  
 辻番都て城外暮合の体爰に權平紺かんをん仲間の拵へ六兵衛辻番親爺の拵へにて六尺  
 棒と持兩人立かゝり居る此見得合方にて道具納ると六兵衛の鯨の三太の生酔と引込し  
 權平の不足とさんくならべ早く連れ歸れとやかましくいふと權平の六兵衛に三太の  
 身の上とかたり宮津の奥様の弟なるゆゑさうやかましくいわせ酒の醒るまで辻番の内  
 に置いてやつて呉したのそ二人りの上下へ別れといふ跡へ上手の方より青山小三郎羽織

袴大小の拵にて手丸燈灯を持先に立つ跡より文子島田かづら振袖着附屋敷娘の拵  
 にて侍女を連れ出て來り小宮という同屋敷の茶の會席に招かれしよしをとなし志な  
 ら互ひにむかひの遅さと兎や角いひ合ひ侍女と見にやりし跡にて小三郎と文子が辻番  
 の前にていろくのとなしに狐火の燃るがさつかけとなつて思はずより添ひ小三郎と  
 り文子へ送る手紙と落す杯ト、色氣ふくとし面白身の處へ以前の侍女戻り來り二人り  
 の様子と見てとつて兎や角いふ内小三郎が燈灯の火と消して狐の所爲なりとおぼすと  
 二人りが恐れて小三郎により添ひ暗らさどさぐる三人のまなしト、小三郎の文子の手  
 ととり侍女と連れて向ふへ這入る跡時の鐘同じ合方にて向ふより親則惣髮被服と着た  
 る儒醫の拵へ跡より親晴慈姑天窓羽織着流し醫師の拵へにて小田原燈灯とさげお房女  
 房の拵へにて六才斗りの花丸の手と引き出で來り(親晴)先生能い處でお目よかゝりま  
 した(親則)身も娘妙子が義は附其方の宅へ參りし所御殿へ參つていまだ歸宅致さぬと  
 聞戻る途中の此面會シテ用事との何事トやと問われこれより親晴のお房花丸を親則と  
 合せれ房の産とし花丸といふの正しく先殿のね胤なりしを小林薫と不義せしとあつて

西坂村の長兵衛の許へ下げられたり若松一伍一什と若松三左衛門が心切ともつて再び花丸と世に出さんといふより親則に佐幕黨の加膽とたのむよしの事とことごとくとなし何卒妹と花丸の爲に若松三左衛門の佐幕黨に組し一國の士の加膽なすやう盡力あれとて只管たのめを親則の正義の勤王を好とし更に承引氣色なきのまう娘妙子と親晴が推舉で御殿へいだせし不都合と怒り親に一度の答さへなく娘と舞姫同様になせし愈々以て量問をかさしサットモ早く娘と歸せと厳しく親晴にかけ合となす此以前上手の方より小柴復市菅浦皮の袴高股立大小頼冠り若松の拵にて出で来り後に様子と伺ひ居るお房思入あつて(房)そんなら兄さん若松さまのお頼も叶ぬういナア(親晴)サア御家老様の思召のお主のお家の筋目と思ふ御本家一の忠節と思へとも先生が御得心あくは是非な事(房)夫と言ふも若君がどふぞ御世に出しぬむ心つきかり夫も叶ぬ上から(親晴)其方の一トまづ在所へ歸り親爺様へ此事と(房)アイとあれよりお房の花若の手と引き燈灯とかつて在所へ歸る親晴の妙子を御殿へ迎ひに行くと橋かよりへ這入る親則思入あつて(親則)御家老若松三左衛門どのより人も知つたる忠直の人なるよ

如何成事とや道ならぬ佐幕と心と飽まで傾け其論の行いぬとて殿と押込花丸どのを當家の跡目よ立んと(○)品よよつたらと此時復市刀と抜き伺ひ寄て親則の後より肩先と切る親則苦痛のまをしあつて(親則)ヤ、詞もかけず欺し討とい何者なるぞと寄らふとする所を一ト討ふ切る是よて親則立身よ苦しむつたり落入復市あたりへ思入あつて(復)流石儒者とかいふ程あつて怨を知らぬ寺内親則殊よ主人の工とバどふやら悟つ今今詞苦しからふが辛抱しる是もあつちの出世の種だと親則よ止めさど此時橋掛りより親晴足早よ出て来り(親晴)どふか今一度先生へといひなから見て悔りなしヤスリヤお師匠をバ(復)コソと押へて頬冠りをとるまれより親晴の復市よ何故師匠と手よかけしと聞くと復市の三左衛門のいひつけよよつて若親則が味方よ付のねバ殺して後の妨を防ぎ其殺しよのを殿と偽り妙子よ殿を殺させんとある深き工よの様子を語れば親晴の親則の死を歎きながら復市よ別れ御殿へ行く跡(復)斯して置けばあつちの目論見と藩主の紋付し小柄を親則の傍へ捨足音よ驚く思入あつて辻行燈の明と消し此後へかくれる同ト時の鐘合方よて向ふより五助島の着附羽織絹つち遊女屋あるトの拵よ

て常盤と印せし小田原燈籠と提出て來り(五)次手といふての濟ね共長らく御無沙汰の  
 お詫旁々お尋ね申そうと思ふて來たがどふり旦那がお内へ居て下さればよいがといひ  
 ながら舞臺へ來る此内上手より以前の權平箱燈籠と持竹川家中女房の拵へよて附添出  
 て來り(權)お嬢様は何所で行違ましましう奥様おあふふござりますといふながら死骸  
 よ襖づき(權)人殺じやと恟りして燈籠と持上手へ逃て這入る(竹)何人殺しとちと五助  
 も恟りして燈籠の明りよて死骸と見て(五)ヤコリヤ旦那様よりト此時復布伺ひ出て來  
 り五助の持し燈籠を切落す是よて兩人恟りして跡へ退く是と一所よ辻番の戸と明け三太  
 廣袖の着附三尺帶道樂者の拵へ寐起のこなしよて前と見込と皆々思入よろしく是より  
 時の鐘忍三重よなり三太の前へ出て來る復市の刀と鞘よ納め行ふとするよ五助小尻と  
 取て引戻すこれより四人からみしさぐり合の立廻り宜敷此内三太復市の懐中よりかま  
 す煙艸入と引出す事あつてト復市花道ベツカ〜と行と三人透し見て(三人)儘よ今  
 のが(復)エイト小石と拾て打附る(三人)下よ居て磔と防る此時竹川の文子が落せし鮫  
 書五助の小柄と拾ひ三太の上手よて煙艸入竹川の真中よて文五助の下手よて小柄三人

一時よすかし見る復市の頬冠と仕ながら向ふへ走りはいる此摸樣宜敷時の鐘の送り早  
 ひ合方よて返し。造物平舞臺上の方家根附の枝折門是より下の方一面よ山吹の盛り柴  
 垣後淺黄幕都て奥庭の摸樣半廻りよて早舞よて道具納ると橋掛りより釋鉢巻乃奥女中  
 六人十手と持出て來り各々妙子が奥殿よて藩主と狙ひお部家お梅の方と斬殺したる様  
 子よかたり捕遊さぬやう用意のこなしあつて上下へ別れはいるこれあて鳴物と打あげ  
 淺妻の唄よなる「朝妻船の淺からぬ契りの昔しりさん宮と此時をつたり音して正面柴  
 垣と破り妙子振袖乃着附水子金烏帽子太刀ととさし淺妻の拵よて白刃の太刀と持出て  
 來りホット思入あつて白刃と鞘よ納る此時上下より以前の奥女中六人伺ひ出て來りヤ  
 アト十手と振上る妙子舞扇ととつて差附る「抑かつこの始りのまつかつ國より傳へ來  
 て唐の明皇愛て給ひと是よて淺黄幕と切つて落と後ろ遠見よなる「そりやいねいでも  
 と又淺妻の長唄よて月の名殘やかしむらんと此内妙子六人と相人よ所作立やらの捕も  
 のよ立まわり宜敷あつて太鼓地より妙子太刀と拔烈しき立まわりあつてト奥女中と  
 上下よ三人ッ、一時よ當て花道へツカ〜とゆく此時(藩主)曲者エイト小柄と拔て打

付ると妙子受留め(妙)父の敵(藩)何と(妙)エイト打返すと藩主小柄と受留(藩)女は稀  
れなる(妙)打もらせしか(藩)めつたよ油断の(妙)今よぞ思ひと藩主のぼんばりの明り  
と吹消と妙子の白刃と鞘と納る是よて奥女中一時は轉る是と木頭(妙)知らさでふと  
かと藩主のすかし見る妙子向ふへ這入る此模様よろしく早舞よて柏子幕

○三幕目 宮津左京邸の場 青山小左衛門邸の場 若松三左衛門邸の場 造物常足

の二重見付小模様唐紙上手折廻り塗骨の障子下手屋敷堀宮津左京屋敷の休權平お國  
捨せりふよて幕明(國)サア奥様の仰しやり付ゆゑ早ふお迎よいて来やしやんせといろ  
くせりふあつて權平と左京の迎よやる權平手鞠唄よて向ふへ這入る此時奥よて文子  
お國居やらぬかぞれへおじやつたすいのみと合方よて奥より前幕の文子好ま振袖の着  
付よて出て来り(文)テ、これよおトやつたういのふ昨日そなたのんで置た失物の  
占方と見て来てたもつたういのうとこれより前幕よ落したる小三郎の手紙と苦よする  
渡りせりふありていろく二人りのはなし半バへ以前の權平あわたしく歸り(權)何  
だり様子に譯ぬが今其處までいつた處のお隣屋敷の小左衛門様が何のお上の御使とて

これへお出なさる夫其所へお出なされた奥様くくとあわたしく呼ぶ是と同ト合方よ  
て奥より前幕の竹川着流しの袴よて出て来り(竹)ハテ何の御用で有うかいのふと是  
と調べ合方よて向より小左衛門鬘斗目麻上下大小少し更たる袴よて入り来り竹川よび  
かひ(小左)定めて其許よも御存ならんが先達て儒醫寺内親則が娘何事の意趣よや諸初  
の夜殿よ刃向夫が爲よ御愛妾お梅の方よの御浴命これ全く我君のお身替よ立しものよ  
て殿の惜よせ給ふも至極御尤よのござれども當時世上温和ならず僅一人の女如きお御  
心と腦給ふ時節よの候ねど君よの兎角愁しと深く物ぐるわしき此程の御病氣其御心と  
思めんと世と過去しお梅の方よ立増りたる女と撰とお部家よ立んと一家中娘と持し人  
々よの御當家はじめ姿よ畫りせ差上よと奥向よりの過日乃お達し依つていつれも畫工  
よ命ト差上たれど是全く老職若松三左衛門が主張せらるる佐幕黨の女色よ以て君と感  
のし己が持論よ傾けんとの下心と推量せし故當家の御主人左京どのと申合し今日出仕  
いたせしお彼源氏の君の雨夜の品定よなぞらへ美人を撰給ふ席よて若御當家の文子ど  
のお目よ留らば其時こそ御諫言と奉り佐幕黨の工とよくぞかんと存せしも一藩よな

らびなら女子どの御標致なれば必定御意は叶はんと存せし所似ても似附ぬ悪女の姿  
 畫然るも殿より返つて夫が御意は叶ふてお部家もあげよと思ひも寄らぬ御懸望夫故御  
 異見も申し難く同道せよとの上と蒙り罷越したる小左衛門イヤ御息女と伴ひ申さん  
 (竹)スリヤ何と仰りやそ娘女子の姿畫が御意は叶ふてお部家も上げよと(小)如何も  
 君の上意でござるシテ其許は我君の御意は叶ふやうと思ふて美人と悪女も畫が  
 れしや(竹)イヤ御意は叶ぬやうとぞんしまして(小)スリヤ左京どのも御得心の  
 上でおさるう(竹)イヤ夫も知らさずして此程國より尋参りし兄杉岡宮内といふ者畫  
 を渡世も致しまする故是も頼んで一枚畫がせ娘が姿と其儘は寫真も書しと夫も見せ  
 似附ぬ姿畫と替へてお上へ人知れず(小)差上しといひるう(竹)ハイ(小)何様なさぬ  
 お子なれば繼子憎とも無理でござらぬ(竹)何と仰しやる(小)竹川どの近頃失禮申  
 分でござれども其許以前と忘れられしうイヤサ思義といふ事御存ないか(竹)是れ又  
 異な仰りやう夫の貴卿仰なくとも元々女子の乳母たる私し素性賤しい竹川といふ心  
 得て居ますわハナア(小)夫を知てござるならなせ義理人情を辨られぬ(竹)夫を貴卿が

何で差圖(小)イヤ差圖の致さぬ隣家の好をぞんずる故御異見を申のトや(竹)何のいら  
 ざる他人のお世話異見を受けば兄もわり心善らぬ者なれば弟もござりますわハナアと  
 小左衛門むつとしたる思入あつて(小)ム、よく仰られた其心根故悪女も畫がさし息女  
 が返つて御意は叶ひお部家も召れし御上意の其身の罰でござらふが(竹)罰か報か存ま  
 せねと上る上ぬ竹川の心もある事(小)イヤソリヤ相成らぬ辭退叶ぬ義なればこそ  
 佐幕黨の手段と知りつゝお受されたる左京殿某逆も上意を受けば同道せねば役目の落  
 度(竹)飯令夫にお受け仕ても女の子の母の儘此竹川が得心せねば貴卿の儘も成ます  
 まい(小)スリヤ上意を背く心よな(竹)サア背させうか背ぬか篤り思案を致せし上お  
 て御挨拶を致しませう(小)然らぬ後刻返答を(竹)イヤお聞お出迄もあく其所が自由  
 のお隣づから垣越ながらお返事を(小)スリヤ上意をば垣越(竹)世話のなみのがお  
 邪でなふて(小)流石の下素の(竹)エ(小)相待申と立服のこなし刀をさす竹川の思案  
 のこなしおて返し。造物常足の二重上下三間ッお仕切し両家の体都て隣同士の様よ  
 ろしく道具納る獨吟あて女子詩繪の硯箱を置文と書居る文字思入あつて(文)最前小左

衛門様のお出の時どふやら子細のありさうなお上みりらのお使ひ若や此身と殿様か召れいせねかと案るまゝ襖趣お様子と聞けばと又獨吟おなり(文)どふり此お告知申談合仕のいと人知れず書認めし此玉章どうやら茶の間はお出の様子さうと(文)獨吟おてりんざしお結び上手の平舞臺へ投る此時上手の御子をわけ小三郎思入庭下駄をとさ平舞臺へおりて文と取わけ(小)チヨコト見身共へ(文)小三郎思入さういふ其方の文子どのうとこれより二人が(小)目と見通ふておじあつて小三郎文を開き愉りなし(小)ム、スリや此程家中の者より委書を差上し其品定の撰おこな(文)アイナアと泣く此以前奥より竹川様子を見て(竹)娘夫小何れ居やる(文)竹川と何をして(小)竹川どのうと行こふとするを(竹)コリヤお(小)三郎との貴御娘と何をしてござりました(小)サアアノ是は(竹)親の目をバ忍逢テモ大を(小)不義徒ら(兩人)エ、(竹)よふ此方の娘とバそりあかして下さりまし(小)ア(文)イエ〜(竹)様左様お狼らがましい(竹)不義徒の覺のあゝと云はまやんずり(小)毛頭此身に(兩人)左様お覺は(竹)其覺のあゝ者が何せ娘へ此文と心と前幕の文を出して見せる(兩人)ヤそれは(竹)アノ

爰な徒ら者めがと急度いひ是を詔の合方あり(竹)常から味な様子と思ふ内とからせ今月十五日小宮様の茶會お招かれ思はず拾し此艶書何と小三郎どの是でも覺がなぬかぬのう(小)斯お目立まどる上からは嘸や母御のお心では御息女とそゝのかし憎い者とモ思召さうが其手紙おも認めし如く(文)親のゆるしと受けて後ちと終お枕もかわせし事なく(竹)どまりや〜どまどまのう口で計りいふては居れど元が乳母の竹川と賤どる故の此不埒(文)何のマア勿体ない産の母おも増りたる此年月の御恩とバ忘れて貴卿へ濟ませうか(竹)其濟ぬと思やるなら何せ大それた事しやつた(文)サア夫の今も申通り(竹)言譯聞ぬ勘當トヤ(小)アイヤ竹川どの其立服の去る事ながら某故お御息女と勘當さして小三郎愈々以て兩親へ身の言譯も相立ず何卒御了問の下さりました(竹)イエ成りませぬ子の徒ら親の役目とする勘當(小)デハ御坐れども左京どのへ一言のお答もなく御勘當とい余り御短慮なさぬ中の義理合と思召何事も(文)娘不便と思召母様どふぞ御勘氣斗りいれ免一なされて下さりませ手と合せて拜ます(竹)何の拜でも大事ない私志や其方が憎て〜ならぬ故夫で勘當するの志やわいのう(小)スリヤ此年頃

實の子よりも猶彌増し愛み申(文)お心おのなさぬ娘と思て連のう遊まますか(竹)つれのうせいで何とせう是迄實の子の様お流さう見たの世間の聞は夫の手前と憚る斗り心の内の憎ひわいのう(兩人)何と仰しやる(竹)サア憎ければこそ殿様へ見憎き悪女の姿書と差上たのもなさぬ子の其方の出世が妬ましき夫が却て御意に入り妾にせよとお上のお使者飯令枕の替さすとも不義の此身の願ひ通りお上との御用に立されば親の高氣で勘當する不埒の元の小三郎どののこささん故に追出す此竹川が無理か道理か親御に問ふて見やまやんせいナア此時上手の障子の内にて小左衛門(小左)イヤ問ふ迄もなさず俸の不埒小左衛門承つたと合方にて前側の障子と明れば以前の小左衛門着流の拵にて釜をかけ爐に向ひ茶を立て仕舞しまなし(小)貴卿の父上(文)小左衛門様にいつの間にな(竹)此場の様子お聞ありしか(小左)如何にも姿書の見憎かりしも竹川どのの御心底只今となつての面目次第もおざらぬとい(小)夫と申も私めが皆不所存より起りし事(文)親御様へ申譯なんとお詫を申ませうや(兩人)御免なされて下さりませ(竹)是故君の上意を拒し御使者様への返答の勘當すれば娘でなぬ文子なれば只今での親の儘にも

なりざる御上意よきに御披露願ます(小左)如何にも其義承知致した小左衛門の役目に對して上へ濟ざる言譯の拙者の胸に思案がおさるとまればより小左衛門の小三郎と引立竹川の文子と勘當して奥へ這入る跡にて文子母の勘當と深く怨む言葉ありて(文)父への申譯にマ、さうじやと懐叙と出し抜かける此時以前のお國走り出ている竹川の胸の内と文子に叫く文子恠りして(文)エ、何といやるそんなら此身が約束せし小三郎様と添したいとして(國)サア夫に附ての殿様の御上意背く事なれば屋敷に在つての不都合とお兄御宮内様の所ろへ早々御供せよとて此通りあさこのお身を頼のお文と懐中より文と出す(文)スリヤ御勘當と仰つたの殿様よりのお咎と思召てのお情なりしエ、知がなんぞくさういふ貴卿のお心と知らで怨む勿体おさせめて一ト言此身のお詫(國)アモシお待遊むせ兎角いふ内日那様のお下りあらむお心盡し水の泡(文)そんならどうても此儘に(國)ハテマアお越しなされませぬアと文子愁のまおしにて返し。造物平舞臺見附唐畫の襖上下折廻り都て青山小左衛門屋敷坐敷の模様爰に小左衛門水上下の拵にて九寸五分と乗せし三寶と前に置き下の方に小三郎以前の拵にて平伏



して居る静なる合方にて(小左)小三郎介借の其方へ申附ぞ(小)ハッ段々との仰せ承  
 きの御切腹とお覺悟御尤にござりますれと罪の此身にありながら子故に父と先立  
 まするの不孝の上の不孝にござれば何卒死と賜り親人替つて君とお諫下さる様偏に願  
 奉る(小左)コリヤ又しても何と申君の上意に是非なくも上使に立たる小左衛門なさぬ  
 中なる竹川どの殿へ見憎き姿書と差上たるも繼子と憎しと思ふ妬かど汝と譯ある  
 娘が望ととげさせんとある心も知らず異見をせし此身の誤依て身共の心底の細々是  
 に認めあれを我首諸共左京との方へ持参なし宮津との尻へは附時勢と述て勤王の大  
 義に再び御心傾くる様一命と捨て諫奉れ我の冥途で相待ん(小)スリヤとふあつても  
 親人よ(小左)サ、父が遺言と忘なべ七生迄の勘當なるぞと此時後にて旦那のお歸り  
 と呼(小左)左京どの歸宅の知せ早介借の用意致せ(小)デハおされどもせめて小二郎が  
 戻る迄(小左)ヤア此期に及んで小左衛門我子たりとて未練のあらふか(小)スリヤ弟よ  
 の死目よも(小左)主家の爲よ替られぬわへと脇腹へ突立引廻す小三郎泣落模様よて  
 返し。造物平舞臺見附上の方床の間違棚是より下の方金襴上下同折廻の金襴床の前

に三寶に三組の盃鉢子を置下手に金屏風あり都て宮津左京座敷の模様宮津左京着附麻  
 上下の拵よて煙草盆と扣へてすむる下手に以前の竹川襦形りにて出迎ひし見得同じ合  
 方にて道具納る(竹)我夫只今お下りでござりまするかお見わけ申せばお顔の色も常を  
 はず何所ぞお悪うござりますか(左)予の心悪しぬい(竹)デハお薬でも差上ませうら  
 (左)拾置(竹)夫でも貴卿お氣分悪いと仰りまするに(左)エ、拾置と申に(竹)ハ  
 アお薬が御意に召さずば無理にお進めも致ませぬと何とやら心にかゝる御顔の色艶い  
 つう期う遊心して如何でござります最前お隣家の小左衛門様より承りし娘が幸ひさ  
 つと祝ふて御酒一ツと立ふとするを(左)ネリヤ其方に娘文子の殿より召れし今日の  
 上意と嬉しう思ひ居るう(竹)サア貴卿の常の御氣質で思召に叶ひますまいの多く  
 の家中の其中で殿様に撰まれし娘が果報親の手柄(左)其差上し姿書は是成ると懐中  
 より悪女に書さし姿書と出して見せる竹川恟りして(竹)ヤ夫(左)其方是を存トて居  
 るう(竹)エ(左)ア、爰も思知らずめづると合方替る(左)コリヤやい今改めて申でなけと  
 ぞ其方元の娘の乳母にて先妻松ヶ枝産後の脳に空しうなまし其砌りとこれより文子を

悪女に書書せし事殺を諫むる手立の狂ひし事など一々ならべて夫と申も己元の身を忘  
れ娘が上へ召れさば身の出世の致さんうと女の妬みそねみより我目に見せたる姿書と  
取替あけし是なる畫像よくも身共をあざむいて忠義の妨致せしよも思へば憎くき下素  
女めとこなしあつていふ此内竹川思入あつて(竹)サア様子御存知ござりませねば其お  
腹立も御尤實のこれなる姿書と取り替へお上みへ差上ましといナア(左)誠に是こそ  
先達つて我へ見せたる娘文子が生るが如き寫眞の繪姿如何になさぬ中なりとて十七年  
が其間母と呼せし義理を失ひよくもかゝる工とせしよな(竹)サア其申譯にいと覺悟  
の思入あつて懷叙と取出し咽へ突立る(左)サアコリヤ自殺なしたるの繼子憎しと工と  
たる此姿書と我に知らせし言譯なさの生害なるウ(竹)何のマア勿体ないお主に齊しき  
娘と憎しと思ふ程あふば其姿書の差上ませぬ(左)ナ、あんと思そ(竹)御恩に報ふ竹  
川が工との様子一ト通りお聞きされて下さりませと竹笛入の合方にあり(竹)いつの程  
にや文子に御隣家青山小左衛門どのの御子息小三郎どのと音かとし末の女夫の約束  
とまれより小三郎文子の様子悪女に書書し姿書の様子文子と勘當して兄宮内の家へ預

けたる委しき様子と苦痛のまをしあつていふ(左)ム、スリヤ娘とバ悪女に書がさし  
隣家の青山小三郎と娘文子が人知さずと此時奥にて(小)アイヤ其不義者の是に在申譯  
の仕らんと小三郎着附麻上下の拵へにて風呂敷に包し小左衛門の切首と抱へツカ  
出て來り(小)御兩親方にお目にかけるも面目あき拙者がふまたら眞平御免下さりませ  
う(左)左いふお身の小三郎(竹)どふして爰へいつの間(小)拙者只今お詫の爲推參い  
たして計らずも襖越しに承り竹川どのの御心底是も皆某故と思へば不義の御成敗受  
べき身に候得共父小左衛門が遺言あてなくて叶ぬ拙者が一命(左)何と言る(小)  
是ぞせめて竹川どのへ父小左衛門が申譯と風呂敷包を解切首を前へ差出す兩人恟りな  
し(左)ヤスリヤ小左衛門どののよ(竹)ア、切腹とせられしとな(小)如何にもとこれよ  
り父小左衛門の遺言をのべ姿書の文子と祝言の益とな時(左)イヤ是も君と諫めの一  
ツ心置さく諷されよ左京祝して舞申さん(小)夫じやと申て(左)アコソト押へて扇とか  
まへ「實にさま」の舞姫の聲もすじまり(小)「住の江の松影もうつるなり青海波と  
は是ならんと小三郎諺を諷ふ此内左京立て舞う竹川懷叙と扱はつたりうつ向き落入る

小三郎見て(小)ヤコリヤモフ事(左)イヤ目出度御前へ参るでござらうと愁と隠すこ  
 かし小三郎の涙を押る此模様にて返し。造物平舞臺真中茶立に上の方床の間違棚下手  
 茶壁上下落間都て若松屋敷亭座敷の模様二重に三左衛門着流しの拵にて花臺花活と置  
 梅の花と生て居る平舞臺に前幕の親晴羽織着流し醫者の拵にて茶の湯茶碗と前に返し  
 苦痛のこなし此見得やとり合方にて道具納る(親晴)ハテ心得ぬ三左衛門殿お手づから  
 愚老へ賜る薄茶一服着と齊しく五臟六腑をちぎる計りよ脳亂なす(三)寺内親晴苦し  
 いうとこれより三左衛門の親晴よ其身の胸中を明し三百年來の恩顧よ報ゆる佐幕とい  
 ひしに全く偽り實の我子の見好太郎を以て國家を押領せん企だてなりと一伍一什との  
 こらす打明茶の中へ入し毒も汝も汝ももられし毒藥なりとの様子をかたるよ(親)エ、いわ  
 ふよふない大悪人飯令毒氣も惱むども汝が悪事のいちくを妹お房よ告げおらせ此鬱  
 憤と晴らさで置ふかと落入る三左衛門思入あつて(三)最息の絶たるかと此時奥より前  
 幕の松田文吾着流しの拵にて刀と提出で来り(文)御老職(三)貴殿の松田文吾どの何し  
 んとござつた(文)外でもござらぬ其許様へ御異見が(三)スリヤ只今の様子を(文)お次

よ於て承つた(三)ヤ(文)三左衛門どのこな様のナアと合方よありこれより佐幕を口實  
 お悪事をあす三左衛門の異見となして忠節と進め(文)君家へ忠節を盡されよ拙者の最  
 早お暇申と立まかゝるを(三)アイヤ文吾どのソリヤサトお約束違ひ申さう(文)との  
 又なせよさればでござる先達て殿中よて某へなんといわれた善惡共に御隨身でいござ  
 らぬか(文)夫の主家徳川家へお心を盡さるゝ其許と存せし故とこれより尙双方問答の  
 末終よ文吾の三左衛門に説伏られ(文)此上の松田文吾伏見に於て救われし我二命と投  
 打て御恩に報ひ申でござらう(三)確と左様か(文)某とても武士の端くれ只今仰せの二  
 言いござらぬ(三)ム、と思入あつて懷中より連判状と出してサア一味同意の連判状此  
 一卷に血判召れ(文)スリヤ血判と(三)今の仰せの偽りか(文)イヤ偽りならぬ誓の今  
 打と刀と抜かけ今打する(三)ム、と連判状と開く文吾の刀と納る是と双方一時の木  
 頭(文)初筆でござるなと小柄にて指と突血判とする此模様宜敷合方よてひやうし幕  
 ○四幕目 殿中諫言の場 奥庭土壇の場 造物三間常足の二重塗がまち見附金襴上  
 下同トく折廻りの金襴橋掛り戸家口杉戸都て奥御殿の模様上下銀燭と灯し爰よ大江幸

七船田新七の兩人麻上下の拵よて侍女二人と追廻し居る此模様太鼓地釣狐の合方よて  
 幕明と新七幸七の兩人侍女とどらへいろく、滑稽のよあしあつて立騒く處へ宮津左京  
 青山小三郎前幕の拵よて風呂敷を包とし首桶と抱へ出て來り(左)夜中ながら宮津左京  
 只今出仕致してござる(小)父小左衛門俄の病氣よ止と得ず部家住ながら小三郎父小左  
 衛門が名代として同道ゆたしてござる此時藩主奥より羽織着流し酒よ酔ふて居るこあ  
 しよて出て來たり(藩)チ、左京の能參つゝ承きバ小左衛門よ急病のよし父の名代太  
 義よあるぞ(小三)いまだ部家住の某君の目通り仕るの忍入て候得共(左)役目の義な  
 れバ小左衛門名代として小三郎をバ召連申してござりまする(藩)シテ娘文子バいづれ  
 よおる彼姿畫又相違あくバ嘸天晴なる惡女ならん予も早く逢て見たい次よ居るうこれ  
 へと申せ(左)イヤ其娘文子おは是へ同道仕つてござりまする(藩)何同道せしといせれ  
 ん居る(小)ハッ病中ながら使者よ立たる父諸共(左)召連れまはりし娘文子(小)小左衛  
 門おも是お候(左)イヤ御對面(兩人)下さりませうと兩人包を解首桶の蓋をわけ竹川と  
 小左衛門の切首と藩主の前よ置きこれより宮津左京青山小三郎の兩人よて和漢の書と

引さ諫言となし(小)若今晚の諫言を我君用ひ給はず(左)生て詮なき我々が一命イザ  
 お手討よ(兩人)遊されませう(藩)チ、手討といよいよ覺悟如何も望も任かすであらう  
 (小)アノお用の(兩人)ござりませぬ(藩)ヤア勤王佐幕の兩説も用てよくバ用ゆべき  
 に予が心も存知えらす聞もうるささ毎度の諫言宮津左京明日より開門と申附るぞ(左)  
 何某と(兩人)御開門とさ(藩)如何おも手討お致すへさ者なれども先祖の勤王家柄に免  
 せ命の助くるなれども青山小三郎に用捨ならざる不義の大罪望に任して斬罪たるべ  
 いとこれより藩主の小三郎と手討にせんと奥に入り小三郎左京の二人りの顔を見合歡  
 息の思入にて小三郎の細にかゝつて奥庭へ引るゝ愁のこきしにて返し。造物常足の二  
 重本縁附の亭家体見附金襴上下落間舞臺前より一面の葉の花盛り上下柴垣の出しかけ  
 空より梅の釣枝都て奥庭亭坐敷の模様平舞臺お土壇とすゑ爰よ小三郎いせんの拵にて  
 すわる上手に新七小三郎の大小を取て立掛り下手に幸七同じく立かゝり居る此見得合  
 方にて道具納ると新七幸七の兩人の小三郎の不興を蒙しと幸ひに惡口なしト佐幕論  
 の徳よあげて勤王論乃非とならざる處へ藩主袴形にて刀と提げツカ〜と出て來たり

(藩)土檀の用意調ひしう(新)是の(新)我君にござりまするか仰せに隨が御覽の通り  
 (藩)チ、太義(藩)シテ死骸と捨ばさ不淨門の明け置し(幸)ハッ其義仰のござりませ  
 ねど門の錠前と取置ましてござりまする(藩)チ、よく心附(藩)此程求めし新身の刀切  
 味見んとし思へども憎さも憎さ小三郎一分試の苦痛とバ其方等(藩)見せ置バ定めし心地  
 もあしかりなん酒宴の席へ罷越予が参る迄過しをれとわたりを遠逃げ(藩)小三郎顔と  
 上げイヤサ面とわけいみの時小三郎顔をわけ(藩)目よいつとい涙とふくそ其方  
 や予が手にかゝるが無念なり(小)比干の諫めて胸を裂き伍子胥の諫めて劍に伏す其往  
 古よりの例しを思へバとこれより種々様々と諫を盡して(小)お家の行末氣遣しければ  
 死すとも小三郎眼の眠り申まじ此身の願ひ叶ぬ上の片時も早く泉下に趣さ父のお傍  
 へ参り度うござりまする(藩)チ、望に任せ此世のいとま取らすであらうと刀と抜とち  
 し青山小三郎只今が最期なるぞと奥へ開へるやうにいふ(小)御念に及ばぬ元よりかく  
 成拙者(藩)心底(藩)覺悟のよいう(小)イヤ御存分に目と閉て覺悟のななし藩主のさう  
 に心を附るこなしあつて小三郎の細と切る小三郎思わづ見て悔りなし(小)是の(藩)コ

リヤ子(藩)心底(藩)見の仕やれと  
 手紙と投てやる小三郎合点の  
 行ぬ思入あつて手紙を取上開  
 さ見て(小)ヤスリヤ我君に  
 此程より酒色にお心亂されし  
 の悪人の御詮索をバ(藩)若年  
 なれども主家と思ふ心体見扱  
 し故斯く計の先達て予刃  
 を向たる女妙子(藩)詮義をさせ  
 ん爲(小)何様彼と捕さバ其頼  
 人も分り申さん(藩)不淨門と  
 明け置たれば人目よかゝらぬ  
 其内(小)身のお手討と披露



なし(藩)姿と替へて彼が詮議を(小)仰及む我君御免と傍有合う大小と抱へてツ  
カ〜と花道へ行と(藩)アコリヤ侍て〜(小)ハツ(藩)女ながらも過日の手並必りせ  
共に油断すな(小)命にかへる拙者が役目手取りになして再生の(藩)目通りの日と相待  
ず(小)先夫迄の我君にも(藩)其方も健固で(小)御機嫌よろしう(藩)ナ、とやろりとし  
て氣と替へ(藩)行け〜(小)ハツト合方にて小三郎大小抱へ向ふへ這入る藩主白刃を  
捉し儘跡を去つと見送り(藩)ア若さに似ざる天晴忠臣と此時下手の柴垣の後より宮津  
左京以前の拵にてそつと出て來り持紙を出して白刃の血沙を拭う藩主思入あつて(藩)  
其方の左京(左)我君様(藩)閉門申附たる其方何用あつて是へ參つた(左)小三郎が今端  
の際一ト目逢ひ度うぞんぞまして(藩)最早死骸の取捨たとい(左)スリヤお手討の相  
濟しのと持紙と見て血沙の附ぬは愉りなし(左)マコリヤお刀は(藩)不禮者め(左)ハツ  
とひさつて両手を突く藩主の白刃と鞘と納る(左)ハテナアト藩主の立身左京の合点の  
行ぬ思入此模様宜ましく合方よてひやうし幕

○五幕目 片山髪結床の場 杉山宮内住家の場 造物三間の髪結床前側上下三尺の

腰羽目床吉と印一たる半障子上手跡へ寄て煎賣店の横手同じく半障子有合御肴酒め  
一と印し下手石垣の草土堤都て場末髪結床の模様爰吉の助好との着附手拭の片髪  
結の拵よて羽織着流一の庄家甚兵衛の髪と結て居る上の方は鎌六百性の拵へ善七町人  
の拵よて火鉢よ向ひ煙艸粉と吞居る此見得鞠通神樂よて幕明と鎌六の庄家の甚  
兵衛と御願主の鷹狩のゐるとおしより杉山宮内の家は美人のゐる事おどいろ〜とあ  
いて髪と結ひ仕舞て上下へ這入る跡は寐て居る松五郎といふ道樂者が起て吉の助も向  
ひ(松)ナイ親方モウ何時たへ(吉)お客様お目覺てござりますす(松)客と待間隣の居  
酒屋で一盃あをつと酔が出てと〜(藩)寐込で仕舞ふの余の程寐たと思ゆるなア(吉)何  
二時程でござります(吉)といつア店とよまざけて氣の毒だつとあ(吉)何明て居る店で  
ござります(松)夫よしても今寐ながら咄しを聞けば兼々三太と頼まれ宮内の内も居る  
娘元より宮内の獨り身故娘の有う筈もあし殊も寄たらお尋もの〜妙子と眼の附されど  
出入の叶ぬ伯父の内故若夫と極つたら引捕へて連れて來い褒美の二人り山わけと吳  
く己への頼だが何でも今の年頃と顔立の様子でいつさり夫に極つとわへ(吉)モン

親方そんなら宮内と云ふ者も娘のなみのでござりますか(松)サア其娘のない内よ女の  
居るの怪有トヤアねへ(吉)そんなら若やアノ妙子がと思入あつてシテ其三太とい  
ふ人の何者でござります(松)夫のわかれが兄弟分の道楽ものだガマア夫よりのチイ親  
方れめへも只の鼠やアあるめへ(吉)何と仰ります(松)サア斯見の所が人品骨柄どふ  
も根からの髪結とい受取れねへ所があるが昔八丈の才三もどさで何か寶の詮義とする  
どか又の親の敵と尋るとか左もなく、今日の時勢徳川家の家來とやらで官軍の模様と  
バ伺う爲の髪結職斯三点張つゝ内よ何所かへ目の出るこなこの素性なんぞ儲口でも  
なる事なら己も片棒うさてへあア(吉)モシ親方御笑談仰やります不意氣の持つ性質  
斯う見へても腹からの髪結でござります(松)ハア夫で別頭巾と脱ても本名のある  
人でいねへか(吉)さう見らるゝ有りがさうござります(松)夫や今の方の儲口は肩  
を替へて行ずばあるめへ(吉)シテ儲口と仰やる(松)今つゝ妙子の一條(吉)エ(松)  
親方大きにお邪ア仕やしたと頼頭よて上手へ這入る吉之助思入あつて(吉)何所の人か  
の知らぬければ三太といふ者も頼まれて妙子の詮義を仕て居るとい此方の身もあ

いる咄し斯ういり手蔓も取附たりコリヤ斯うしての居らぬわへと手拭と肩にかけて  
尻をかかげる此模様敷物頭よて返し。造物半舞臺真中風雅なる家根附片開き竹簀戸  
の門此柱は浮世繪師杉山宮内と記せし表札左右一面生垣此内所々梅の立木後淺黄暮空  
より梅の釣枝都て宮内住家入口の模様宜敷道具納ると向より鷹一羽舞臺へ飛來るハダ  
くにて向ふより前幕の藩主野袴ぶつさ大小切緒の草鞋鷹揚枝と腰も差たる鷹野の  
拵跡より前幕の金子又市神石服若尾栗櫻等の諸士いづれも半天股引大小切草鞋の拵お  
て一文字の菅笠と冠り又市海主の陣笠と持走り來り花道も留り(皆々)我君様と下たよ  
居る是と欲の合方よ成り(藩)我生得符と好し今日しも催と鷹野の得物多さよ心地よく  
猶も鷹と合さんと思ふ折しも一物の鳥もやなぞ驚さしか他へそれ行し小霞の跡と暮ら  
て如月の(又)空も長閑と晴渡り外山の腰と廻るある(神)霞の帯も解初し峰の班らよ雪  
解して(石)緑りの柳紅ひの花こそ未だ咲出ぬ(服)梅の頃しも盛よて春風送る野邊の  
香よ(若)薫と競ふ菜の花の畑も胡蝶の戯れも(尾)莊子が夢よあらぬとも今日一日の歡  
樂の(栗)百年の壽も保へさ我々共が樂しと斗りか(櫻)君もも興よ入らさし所お拳とを

て(皆々)残念至極(藩)遠くへ行まし行衛と尋ねよ(皆々)心得ましたとこきよて舞臺へ  
 来り宮内の庭松又羽と休め居る小霞と見附鷹匠を召てとらせんとする時門の内(文)  
 アイヤ暫く其お鷹只今夫へ差上ります(皆)何と一説の合方又さき門の内より前幕の文  
 子さら毛の島田かづら振袖の着附在所娘の拵みて手は鷹と据出て来り平伏する(尾)ス  
 リヤ其方が(皆々)お拳とバ(文)サア只今庭の掃除致して居りましたさバ何國よりウハ  
 此鷹の庭木の松又飛来り羽と休めしハ心得ずと思ふ折柄殿様のお越しに成りし様子よ  
 て扱へお手餉の鷹成りとぞんどまーて呼迎へ持参致してござります(藩)ム、扱へ此  
 女鷹飼又馴れし者と思わるシテ其方の何者トや(文)私し事ハ此家の娘よござります  
 (藩)表よ浮世書師杉山宮内と記せしが其宮内と申者の娘(文)左やうよござります  
 (藩)流石書を以て世と渡る程のつて物好寄したる家居の風流シテ其方の名ハ何と申ぞ  
 (文)ハイあやと申ます(藩)テ、あやといよ名じや其方の宅と借用いたし今日の酒  
 宴の興と盡さんとこれより皆々渡りせりよまて宮内の裏の梅林又入る此時橋掛りより  
 以前の松五郎頰冠りをして伺ひながら(松)鷹の三太又頼まれよ今の女又違へねハ名

こそあやとか言ては  
 居れと味く持かけ順  
 主の殿と此家の内へ  
 連込だは咄し聞た  
 恨とバ晴さうといふ  
 心の目算とふり彼奴  
 とまよびさ出し金儲  
 みえてへものだごと  
 思案のこかし此時戸  
 家の内よて松虫と照  
 すと六部三重よなり  
 向ふより前幕の妙子  
 葉東ねのかづら鼠の





着附脚半草鞋六部の拵へよて出で来り花道よて思入あつて(妙)浮世と忍ぶ身の上よ  
 りそよ吹風の小便も心と沖の石ならで袖も乾かぬ父上の恨をを晴らし申度女子の  
 身よてあられもない偽六部と姿と替へ狙ふ敵の今日の鷹狩此圖ととすさず取討らんと  
 爰ら透りと徘徊させど名乗かけての近寄らさずどふぞ首尾一て今日よその本意が透た  
 いもの亥やあアと思入あつて舞臺へ来る此時門の内よて(新幸)うしやうくと船田新  
 七大江幸七やとり半天股引大小の拵よて文子と引立出て来る杉山宮内坊主かづら着流  
 し被服と着たる更一畫師の拵よて庭下駄とはき留寄がら出て来り(宮内)マア待て下さ  
 りませ只今殿様のお召故お目通りと致せし所貴卿方お二人りが裏の口より這入ておぎ  
 つて是の宮津左京の娘繩と打と仰一やると御願主様さへ畫姿に違ふて居る故うりで  
 ないとお留なさると無理やりよ是へ連れておぎつたのどうなさるのかいぞんじませぬ  
 と是の私しの娘にておわやと申者に違ひのおざりませぬとゆるく言譯しても聞ぬ二  
 入りが文子ととらへて左京の閉門より小三郎の手討竹川の自害の一匹一什と一々な  
 べたて文子と引立既に繩とかけんとする處へ以前の妙子が中に這入二人りといひ込め

文子と助けて此家に泊り藩主と討んと狙ふ心知つて知らぬ顔の杉山宮内が妙子に助け  
 られし一禮との竹川ならびに小三郎の爲に讀經とたのむせりふあつて小三郎の手討  
 るなりしと聞て愁に沈む文子の手とり妙子の案内する(妙)イザ御案内と錫杖と突さ  
 下されませうと此見得よろしく返し。造物平舞臺真中一間半藪庭同家根左右建仁寺垣  
 此前一面の梅林舞臺前菜の花の盛り都て宮内宅梅林の体爰に毛氈とかけし竹床几を直  
 し是に結講ある提重と置藩主以前の拵にて腰とかけ以前の諸士八人扣へ居る此見得半  
 まじりより鶯笛詠への合方にて道具納る(藩)梅なればいやしき賤が庭迄も呼ねて來  
 啼鶯の聲何と皆の者閑静を事でないかと皆々へ渡りせりふありて藩主ハ胡蝶の飛と  
 見ながら提重の酒と酌させ既に呑んとする時胡蝶の酒器の上に落しと見て(藩)ハテ心  
 得ぬ今迄狂ひ戯れ一番の蝶の死したるハ(皆々)何事でおざりまする藩主もーやといふ  
 思入あつて盃の酒と下にこぼし見て胸りなし(藩)コリヤ此酒に毒を仕込もものあるぞ  
 (皆々)何と御意おされさる(藩)今酒と注ぎたる此若草のまやれしと見よと皆々下と  
 見て(又)コリヤ膳番に毒味させ(神)まこと毒酒と極まらば(石)夫から夫へ(皆々)詮議

とべと立上ると(藩)アコリヤ待て〜(服)でも此儘に(皆々)捨置まして(藩)イヤ捨  
置難き工となれども今勝藩に毒味させむ詮議の元を失ふ道理されども此義ゆるかせ  
に致し時に愈々悪人となりて猶此上にも如何様なる工となさん計られを既に先  
夜も寺内の娘妙子が不慮の變あり國の爲我爲に命と投打此酒の毒味なす者あらざるや  
(皆々)サア其義の(藩)ハテ日頃の勤王佐幕など、兩派と立て、争ひ我爲ありと申せ  
共かゝる場合に到つての忠義に死する者なき、扱々臣下多き中にも誠の臣のなきもの  
じやあアと是とをた〜になり向より前幕の若松三左衛門野袴ぶつさき大小切緒のわ  
らトにて走り出で(三)アイヤ暫く〜〜〜恐れながら其毒味某に仰附られ下さりやう、  
ならバ有がさう存トまるといひながら花道より平伏する(藩)誰りと思へバ其方若松  
三左衛門(藩)只今お越〜(皆々)召れし(三)拙者先刻小段のそれ行しよりお供におく  
れお跡と慕ひ参りし所此家にお小休と承り來つて見れば此場の有様何卒拙者へ毒酒  
の試と仰せ附られ下さる様偏に願ひ奉る(藩)スリヤ毒味とバ其方(三)君のお爲に一  
命を捨る臣下の習にして珍らしからぬ御奉公(藩)ハ、流石の若松願ひに任せ毒味と

ゆるす(三)ハ、ハア、とツカ〜舞臺へ來り君のおゆるし蒙る上りイヤお酌とと盃と  
とり上る(惣)ア、イヤ御家老御家人多き其中にも貴殿の屈指の御家老職(傳)また外々  
に替る者も候わん(皆々)先暫御盃とバ(三)イヤ御尤にのこされども君に奉公致  
すもの身柄の高下がおざらふや誰彼と申さんより某毒味致しなバ悪人詮議の便宜とな  
り一ツの君へ平生の真心と知しめん事三左衛門が願ひにござれりお止下さるや(皆々)  
アハおざれども(藩)コリヤ〜三左衛門が願ひとバ拒まバ彼も本意なるまじ子か免す  
次げ〜(皆々)ハツ〜(藩)ハテ倍次げと申に(仁)ハ、ハア、(藩)待て〜(三)ハツ  
(藩)三左衛門夫りや毒酒であるや(三)夫故お毒味仕るでいおざりはせぬ(藩)スリヤ愈  
々家ども身とも厭ひす(三)君家の爲に何り厭ひ申べさ(藩)ム、見事にすこせ(三)ハ  
ツと呑ふとするを藩主扇よて盃と打落し(藩)心体見へた(三)何と仰しやる(藩)三左衛  
門よく承れとされより毒酒乃試とさせし臣下の忠奸とさくらんためにさかりし事と  
いふより三左衛門の心中と見抜今より佐幕論に賛成なといふ渡りせりふありてト  
三左衛門の五百石の加増と申渡され身乃立身と喜びのあまり尙も其身の忠を見せんと

毒酒の罪人青山小次郎なりと大江船田の兩人にて呼び出させこれに毒酒の白状させんと皆々の渡りせりふありてト小次郎といひ詰る(藩)コリヤ一應でハ白状ハ致すまト今より屋敷へ連れ歸り予が糾問といたすであらう(三)アイヤ我君ケ程の工と致者申さ必恐入ていごされ我君の御尋問でハ中々白状思ひも寄らず拙者預り屋敷に於て筋骨抜ても左京どのノ頼みの白状いたさせて御覽に入れん(藩)スガヤ其方が小次郎と屋敷に預り毒酒の詮義と(三)夫も家のお爲と思へハ拙者力の及ぶごげ(藩)命と斷事相成ぬ予(三)大罪人ハ候得者めつたに命(藩)ハ願ひに任せ預け遣す(小次)スリヤ拙者めと御家老へ(皆々)お預とな(新)今晚より(幸)火水の拷問(小次)餘りとムヘバト立かゝるを(新幸)動きおるなと引附る藩主思入あつて(藩)ア思へハ憎ツくいトホロリとする思入あつてやつぢやナアと此模様よろしく合方にて返し。造物常足の二重見附真中のれん口上の方床の間此次佛壇是に紙に書し竹川小三郎の俗名をかけ花立燈明線香を立佛壇の前に妙文の打き釘置あり上の方茶壁上方家体前側腰塗の半窓障子明立あり下手落間跡へ寄せて建仁寺垣此前梅の立木いつもの所切戸都て宮内居間の模様二重

以前の妙子上方又宮内下手に文子合方にて道具納る(宮文)御回向ありがたふ有ます(妙)何の其お禮よ及びませう最前のお詞にハ大方それとい察しまとしたのらんなら此お娘御ハアノ宮津左京様の(宮)サア其素性とハ申あハ身にも係る大事故申まとい存ト多なれど難義とお救ひ下された御深切な貴卿故斯打明て申ますれど今もお咄し申通り最期を遂た竹川ハ此宮内ハ實の妹此お子様の産れた時乳母ハ上つぬが御縁よて左京様のお手が懸り御家老様の奥様と敬れたる妹が出世それよつれて私し迄家まそひさふおびりますれど梅林から田地迄求て下さつたお影よて何不自由なく暮して居るも左京様の御恩といふもの夫故妹竹川が非業を最期も今で思へハ御恩報トと存トますれハ一倍涙が溢れまそる(文)其時の御心底と聞けハ此身が可愛さ故今期一て伯父様の娘と申て名を包と忍んで居るも母様のお心よてハ未始終言ひかわらる小三郎様と女夫よせうとのお情も終り水の泡となり母様はトめ小三郎様迄非業よお果なされしハお痛はしふござりませるわいなア(妙)サア夫も皆過去の宿業歎て返らぬ事されハ只なさん人の跡々を怨み吊ふが夫へ貞女母御へ孝行何と伯父御左様でハおびりませぬ(宮)ア、

よふ仰つて下さりまし。噂と聞ハ殿様へ敵と云程の大悪人剛い女子と思ふた見ると  
聞くとい大きな違ひ(妙)エ(宮)貴卿妙子様でござりませうがなサ、詮義の殿敷貴卿故  
お隠しなさるの無理ならねど最前聞にお名前まで儲り知つたお手の内夫は違ひござ  
りませぬが(妙)お暇の申せざる(兩人)モシわなたのどれへ(妙)其名を知られし上  
からの(宮)イヤお氣遣ひなされませると双方せりふありてトイ妙子と上手の障子の  
内へ入る女子跡にのこり思入あつて(文)浮世の知れぬものぞやナアと佛壇に向ひ打釘  
と鳴らし回向のまなし是と獨吟の念佛あり向ふより以前の吉の助尻からけ類冠とな  
し出来り(吉)開けバ殿よ此家の内よお小休と有故若傍輩見られなバ殿の御趣意  
よ背かんと面と包んでやうくと忍び込れたる宮内が住家(文)ホンニ思へバ一ト夜さ  
の添ふしこそせぬけれど未来永く女夫と(吉)いひうとしたる女子にの家出とをか  
り聞たれど今何所も居る事やら(文)いふも未練事ながらせめて貴殿の傍けなりと  
(吉)逢た見たいと思へども役目大事に今日迄も(文)知らせ暮した貴卿の成行(吉)  
達者で居るか但し又女の淺い心から(文)死でお傍へ行たいけれど(吉)儘よさらぬが浮

世として(文)夫さハ叶ぬ父上へ(吉)孝と忠との二道(文)世は長らへる此身のつらさ  
(吉)せめての今日の役目が叶い(文)望の通り長未來で(吉)どふぞ逢たい(文)死たい  
わいなアと兩人心々の思入よて文字又佛壇に向ひ釘を鳴らと是とやとり念佛よて吉之  
助舞臺へ来り内と伺ひ思入あつて(吉)佛間に向ふ女こそ咄し聞た儲り妙子お尋者の  
妙子捕らと首筋ととらへ平舞臺へ連れて来る(文)何此身とバ妙子といハ兩人顔と見合  
し悔くりあし(吉)ヤさういふこなたの(文)小三郎さまか(吉)文字どのの(文)よふ迷ふ  
て来て下さんしたなア(吉)何といわると是と詠の合方なり二人りが身の上の筋と  
語る此時上手の中窓より障子と明け以前の妙子様子と聞く此とたんよ吉之助と顔を見  
合せ障子をびつしやり切る吉之助佑といふ思入あつてとつと立て行ふととるを文  
子取附(文)コリヤさつそうしてあなたのどれへ(吉)咄し違ひぬやはり此家(文)ソ  
リヤマア何ガ(吉)お尋もの寺内妙子(文)エ、(吉)それと拂て二重へうけあがる家  
体より宮内ツカ〜と出で立ふさがり(宮)お若のコリヤ何所へござりませぬ(吉)イヤ  
ナト詮義あつて参りしもの故(宮)其御詮義とい妙子とやらでござりませぬ(吉)如何

よも是なる一ト間の内(宮)イヤ存知申さぬ左様なもの決して此家(宮)居ませぬ(吉)  
 なんと(宮)サア只今われうら櫛子を聞けば文子のいひかじきたる小三郎どのとやと  
 されより妙子(宮)救ひれま様子と手短まいひト吉之助の小三郎を文子(宮)いひつけ奥へ  
 やる此時大勢殿様のお立と呼ぶ妙子出て来て(妙)スリヤモフ殿のと息込を宮内とめて  
 (宮)アモシお静おるされませと兩人あたりを氣遣う此模様よろま合方よて返し。造  
 物元の通り爰(宮)三左衛門がんだう燈灯を持藩主兩人立かり居る此見得合方時の鐘よ  
 て道具納る(三)左様ござるバ我君様(藩)三左衛門太義おる(三)まづと合方よて  
 藩主先(宮)三左衛門花道へ行是とバタ／＼おて上手より廣袖の若附三尺帯尻うらげの道  
 樂寺二人文子が着附の裾の出かけ駕と繩よて巻是をかいて走り出で來ると宮内追りけ  
 出て來り跡棒の腰をとらへ(宮)己れ三太の言附とて娘をやつてよいものう○やりまし  
 いわへト脇腹を蹴上る是よてもんせつしてどふと下(宮)居る此向(宮)兩人の駕よかいて橋  
 うりへ走り這入る藩主花道(宮)立留り(藩)今の(宮)儘(三)アイヤ殿(宮)是(宮)渡らせ給  
 ん(宮)立騒で尾籠千万と提灯をさし出し藩主(宮)是(宮)居ると知らせるこなし此時上手の生

垣と押し前幕の松田文吾黒羽二重の着附素綱野袴忍び頭巾を冠りし捲よて六挺がら  
 みの鉄炮と持是と一所(宮)下手の生垣を押し妙子(宮)笈を脊負おななく鉄炮を持兩人半身  
 出で藩主(宮)筒先(宮)狙ふ此時丸窓の障子と明(宮)さし爰(宮)吉之助いせんの松五郎(宮)引附居  
 て(吉)うぬ曲者め(四人)ヤト文吾妙子の我身の事(宮)心得後へ鉄炮と向ける是(宮)本鉄炮  
 よて吉之助松五郎の骸よて受る是よて松五郎打抜れしよな(宮)血(宮)吐(宮)苦しむ此音よ  
 宮内心付く(藩)扱こそ怪しいと舞臺へ息込三左衛門(宮)燈灯の火を吹消そ文吾(宮)妙子と  
 顔を見合せ妙子の錫杖と突文吾(宮)頭巾を取る吉之助(宮)松五郎(宮)平舞臺へ投返(宮)宮内(宮)  
 足と踏出(宮)是(宮)を双方見合(宮)木の頭(宮)其駕戻せといひながら脇腹をささる舞臺花道を  
 見込(宮)此模様よろしく早めの合方よてひやうし幕藩主(宮)思入(宮)あつて(藩)三左衛門何事  
 であらふな(三)イヤ別(宮)でもない義と見(宮)ま(宮)さ(宮)る(藩)左様(宮)といひながら藩主好(宮)の  
 謠(宮)唄(宮)此内三左衛門(宮)燈灯の弓を取り燈灯とた(宮)んで袂(宮)入れ藩主(宮)の油斷を伺ひ討  
 んといふ心よて刀の柄(宮)手(宮)をかけるを藩主(宮)始終三左衛門(宮)心(宮)を附け油斷(宮)とせぬこ  
 しよて謠を唄ひながら三左衛門(宮)の(宮)す(宮)を(宮)狙(宮)ひ(宮)か(宮)ら(宮)向(宮)へ(宮)這(宮)入(宮)る

〇六幕目 若松屋敷飯半の場 鮎の三太裏借家の場 造物平舞臺正面荒木丸太の半

格手下手柵矢來都て若松邸内難藏飯藏家の摸様爰は熊六仙内五間平紺盾板形りの中間  
よて荒廷を敷仙内自惚鏡と髭と扱て居る五間平の古葛籠を反古よて繕て居る此見得  
よろしく合方時の鐘よて幕明と熊六仙内五間平の三人よいろく渡りせりふ在て小次  
郎の半番をする筋となりる處へ出入八百屋の小者ぐすの勘太といふものが役人に隠  
れて三人の番の者へ賄賂を送り其場を去らせし處へ前幕の三太好との着附三尺帯類冠  
りよて出で來り(三)勘太御苦勞で有た實の己も案事て居たが今三人の仲間が裏くら出  
た故まづ安心と塀を乗越て來たの(勘)チイ〜兄貴また其上よ仲間めが半屋の鍵迄  
預けていつた(三)何ぞ鍵を手前に渡していつた(勘)そりや此通と鍵を三太に渡す  
(三)おれつゝ誠にて天の與とコリヤ勘太是迄來りやア此方の物ご手前の人目にかゝらぬ  
やう早く裏門から行てくれ(勘)夫じやモ用いねへのと合方にて探りながら橋かゝりへ  
這入る跡本釣鐘の合方にて三太傍にある葛籠に行當り(三)エ、胸りしたコリヤ何と  
さぐつて見てコリヤ葛籠な何んであんち物と出して置キヤアがると脇へ寄せ又探り

赤がら飯半の方へ來る此時半の内の黒幕とすると内に小次郎中月代好の着附前帶實勞  
れたるこなし三太の半の口へ來り鍵にて錠前と明る小次郎の此音を聞き合点の行ぬ思  
入此内三太の潜りの開戸を明け内へ入るこなし小次郎の様子を伺ひ扱ひ若松が惡計に  
て暗殺に來さうといふ思入にて勞れながら油斷せぬこなし三太の戸と明て(三)小次郎  
どの〜(小次)ヤア何者かれが夜陰に及び此獄家へ忍び入しぞ子細と申せナ、何とト  
急度いふ(三)シイ〜と聲と制して(三)マア〜何も跡で譯る事ご人目に掛つちやア  
何んにも成らねへ早く〜と手と取つて引立る小次郎の惣身の痛むこなしにて(小次)  
アイタ、と苦しむ三太の扱ひといふ思入にて(三)コリヤア瞬さに違ひなく拷問の  
嚴しいので骸が利りねへのウコイツア困つたものご兎も角も外へ出さにやア仕方ぬね  
へと小次郎を半の外へ抱へ出してどう仕様といふ思入有て(三)ム、メた幸ひ今の葛籠  
サウダ〜と以前の葛籠と引出して蓋を明け(三)モシ〜譯を云にも心がせくら窮  
屈でもナットノ内此中へ這入つて下せへ此屋敷さへ擔き出しやア跡のモウ此方の者ご  
と小次郎といろ〜と介抱をする小次郎も心得ぬ思入あれども屋敷外へ連れ出すとい

ふ詞に少し安堵の思入あつて葛籠の内へ這入此時雜藏と半屋の間より小柴復市葛蒲草  
 染の着附尻からげ一本差若黨の拵にて伺ひながら板足にて出で来る三太の下手へ行ふ  
 とする此時復市ツカ〜と出で葛籠をもちらへて引戻す三太の胸りして是と振拂ふ是よ  
 り宜敷立廻りいろ〜あつて三太の手早く積ありし炭俵らと取つて復市に投附る是に  
 て復市よろ〜として跡へ下がる三太此際炭俵と足り〜にして上へ登る復市の三  
 太と捕へやうとして炭俵に取り付く三太の片足堀の家根へうけて片足にて炭俵と蹴の  
 ける是にて復市の炭俵を持つた儘尻居にどふとある三太の松の枝に取付く是を双方見  
 合せ早めさる合方にてよろしく返し。造物二重鼠欄間上手障子家体二重の見付上手押  
 入真中納戸口此下手茶壁是に龜未成る神棚のつもの所に門口すつと下手長家の惣雪隠  
 ぶもく溜杯よろしく都て裏借家の横櫓二重の上に角行燈と灯しこの傍にお千代結髪前  
 帯勤上りの世話女房の拵へにて針箱を置き夜あべ仕事をして居る下手に以前の勘太二  
 重へ腰とりけ烟艸と香居る此見得時の鐘さんげ〜の合方にて道具留るとお千代の勘  
 太に今宵の働さ〜と譽め三太の事と氣遣うせりふありて我々身と三太の改心せし事杯い

ろ〜はなした勘太の暇と告げて同じさんげ〜の合方にて橋掛りへ這入る跡にお  
 千代の身の上を思ひ三太の戻りの遅さと氣にかけ奥にかくまう女子の事と案トる杯の  
 一人り舞臺ありて(千代)モッ内の人も戻つて見へさうな木のドレ今の内に女子様にと  
 唄時の鐘になりお千代の奥へ這入る時の鐘を打上げ跡床の淨るりに成り一人の身の性  
 の善なる謎や鱧と仇名に呼れさる三太も今のとげ折て海より深き思愛の百筋血筋の伯  
 父伯母の義理の重荷を脊に負ひ逃れて戻る路次の口と此淨るりへ犬の聲割竹の音を冠  
 せ以前の三太やとり頬冠り尻からげにて葛籠を脊負ひ出て來りこさしあつて(三)ヤレ  
 く淨雲所であつたとい是程千平万苦をしてやう〜救ふさ此お人と先刻の奴に取ら  
 れた日おの念々憎みが重つて命と取るのせふのものイヤひやひな所であつたわい「胸  
 撫おろし行く跡にそつと伺ひ付來る復市と向ふより以前の復市頬冠り尻からげ一本差  
 跡より紺着板尻からげ頬冠りをせし下部と兩人三太の跡を付て出で來る「三太の人の  
 有るどとも夢にも白地の手拭ととつてイビ門の口と舞臺へ來り跡先見廻し手拭ととる  
 復市下部の兩人の花道にへ〜つて様子を見て居る三太の此内門口と明内へ這入り門を

べてはつと思入復市と下部の振足にて舞臺へ來り内の様子と伺ひ呷きながら下手のお  
 もく場の影へ小隠れとする三太のよろしくふなしあつて(三)コソカ、ア今戻つさヤレ  
 くぐつかりと草臥さとい「どつかりおろす重荷の葛籠お千代の奥より走り出て三太  
 の二重の上へ葛籠をおろすお千代の奥より出で來り(千代)チ、三太さん今戻つてわ  
 つさういナア無マア草臥たておさんせうト葛籠を見てソシテ此葛籠の(三)コソと一  
 すお千代又呷き彼お方トやとい(千代)チ、そふでござんしたういナア最前アノ勘太さ  
 んの來てな(三)ム、アノ野真り知らせに來さうと夫聞て安心といふもの(千代)其安心  
 より此中の彼のお方も御窮屈少しも早ふお出し申て(三)成程さうぶ此お方のおれがお  
 出し申から手前のおれお小次郎様とお連れ申て來さ事を文子様へチットモ早く(千代)  
 アイノ合点さやわいナアと三太の葛籠の蓋と明け介抱して内より小次郎と痛むつて  
 出す小次郎の中より這ひ出て(小次)最前の暗まざれといひ人目を厭ふ獄家の外何事も  
 聞ざれども身も覺へなき災難よて死よ到るべさ某を何者なればケ程迄危急を助け呉た  
 る御身の如何成る所縁の若成早ふ聞せて下されいのみ(三)サ、御合点の参らぬの

御尤お助け申此私しの身の上から一伍一什のツイ一寸咄しよ出來ぬ長物語お千代早ふ  
 お連中さぬかぬ(千)アイノ口前のお千代振袖の文子を連れ出て來り兩人の顔を  
 見合伺りして(文)ヤ、貴卿の小三郎様の弟御小次郎様でござりましたり(小次)チ、さ  
 ういふ其方左京どののお娘御文子様であつたるり(文)ハイノ文子でござりますわ  
 いナア貴卿のお身の御災難を薄く聞て幾世の苦勞よふマア御無事で居て下さりまし  
 た奇ア(小)そんなら身共が災難をば(文)斗らせ承りましてお案事申て居りましたによ  
 ふまアお命全ふして(小)何の格別をきた様にも御息才にて何より重疊左の去りながら  
 某が危急と助け此家迄連れ來られし某様子を聞ねばさふも合点が参らぬ(三)サ、譯ら  
 ぬのも御尤斯うお互ひに御縁者とお逢せ申た上からちつと長ひ咄しなれど此三太が  
 身の上うらいとねばならぬ一ト通りかい摘ぶ所が斯うでござると替つた合方になり其  
 身の素性竹川の身の上宮内の事外子の事文子の間違其他の事まで一伍一什と物語する  
 (小次)ア惡に強さの善よもと聊ある因より斯迄身共を瘡り呉る三太どの夫婦が眞實  
 忠のわらぬ忝なふでさるや(三)何のお禮の及ませふ是も三太が今迄の親への不孝身



の悪行爰等で心と入替ねば仮分私しの此首が三ツ有ても足りませぬわいと思入あつて  
 時よ暁アヤ今夜の余の程更ての居るし小次郎様も骸の腦と夫斗りてなく文子様が小三  
 郎様の事よ附き又お咄しも有ふから早くお奥へお連れ申て御でも焚て上るがイヒ(千)  
 アイ〜成程夫がよいといナアさうしてお前のお飯でも上るかへ(三)イヤ〜己りや  
 晝の酒の残りガアノ押入は有るうら茶碗でグット引付けて勞れ休めは横も成ふよ(千)  
 そんならさうまやしやんせ何ぞお肴と拵へやうりへ(三)何サそんな事が入るもの酒  
 も冷で大事ないうら手前早くお二人り様と(千)左様なら若旦那様と御一所に  
 狭ひ内でのござりまするが奥でゆつくりお休みなされて下さりませ(小)憚りでござり  
 ますると奥へ這入る(三)ヤレ〜まづ是で一ト安心何たる宵からあくせくしたので腹  
 の工合と悪くしたドレ〜をい引つけかけやうと三太子酌にて酒を呑居る此前方より以  
 前の復市下手より伺ひ出で様子と聞居て此時門口を明け(復)ハイ一寸お頼申す(三)  
 エ、誰ぞへ今時分にお前何處から來なかつ(復)ハチ何處からどの粹ぢいひやう私  
 しや若松の屋敷からこなたの跡と附て來たのサ(三)何若松の屋敷から(復)サアちつと

臆にも答るで有ふが屋敷と連ざした大罪人の小次郎と態々爰まで取に來このサ(三)殿  
 から棒に人の内へ大罪人の小次郎のとそりやア大方門違外と尋て見なさるがいひ(復)  
 コレサ〜大概にとおけなせへ外の者なら權香で黙止歸るか知らねへが己の其手を喰  
 ちやア居ぬへ道樂上りの遊び人鮎の三太とムム名まで知つて來このも此己の若松三左  
 衛門が普代の若黨其名も小柴復市とムム少じの骨の有男た外でも有るう大それた門戸  
 も殿しい御家老の屋敷の塙と乗り越て殊にの獄家の錠と捻切りお家と狙ふ悪人を脊負  
 出かゝにやア此方も同類素直に牢舎の小次郎と出して渡せば夫迄が四の五のいへば  
 表向繩目の退れぬあるこの體平愛目と見るよりも詞の甘々其内に早く玉をば出して仕  
 舞やまことさしあつてらふ三太も思入あつて(三)愛目に逢ふの繩目のとららんご事を  
 いひなさるが是迄勝負やりは事てくらひ込でもまんざらとめ通りも居ねへかくだお細  
 ぐらゐとおそれるやうな此三太じやアねへけを思小次郎とく小四郎とかそんな男に用  
 いねへ知らねへ者どい何の爲に引すり込むいれいねへわい(復)そんならどうでも知  
 らぬといふのう(三)如何もも知らねへ覺いねへとい(復)知らざア知らぬよして置ふが

そふして爰に在る葛籠の貴様何處うら持つて來ぬのぞ(三)エ(復)此葛籠の己が屋敷のしりも女中の持道具破れと繕ふ其反古のしかも出入の青物やが屋敷へ來した古通ひ若松様とべつたり印し帳の張葛籠がどふして爰に置いてあるのぞ(三)ヤ(復)罪さへ重い此葛籠へ入れて背負出す其前と黒眼で見抜た復市是でも知らぬとつゝはる心か(三)サア夫の(復)其本人と爰へ出すか(三)サアそれの(復)但しの踏込家さうせうか(三)サア(復)サア(兩人)サアくく(復)白い黒いの返事としやれあ(三)葛籠の証據と見られたから未練らしく隠しねへ如何も青山小次郎どのの屋敷へ忍んで引出したごなたが小柴復市という若松普代の若黨なら己も知られた鯨の三太盗た罪のがれねへが其罪とばいひ立りやアこなも罪科の遁れねへせ(復)何此復市は何ぞ罪科が(三)何のねへとさせるものかと懐ろより前幕のかます煙艸入と出して(三)何と胸りするで有うしかも今年の正月中旬素人でさへ双六とかいろとかるたと賭事の流行時候は此己も勝負の元手と伯母泣つさ四五兩金と借り出して幸さよよしと其の途ちうで寒さ凌ぎよ引つけ酒がまどつた千鳥足何處へ行くやら無我夢ちう酔が廻つて足さへ利り

すお城外の辻ばん所へころげ込んで白川夜船襟へ吹き込む春風は夢り現か白刃の光り其處が本性違はずの譬の通り生酔の滄浪足と踏しめて見れば無慙や何者か主の白刃の後げさむごい仕事と剛々ながら伺ひ寄つさる死骸の傍ら思ひを拾ふ煙草入中に入つさる若松の門を出入の通用切手名前の小柴復市とべつたり印し此木札己が今夜の始末をば太細の云のなら罪の重荷を天秤にかけたら葛籠の目方より余程重ぬこなこの業情夫もどふや頼人が有ての事と白眼で置た己が罪とば洗ふ氣なら此方も証據と持出して怒ながらと喰せた日ニヤア其方の首も浮雲もの五分と五分との差引で勘定する夫ともに表向へ出す氣な目方の上の淨玻璃へかけて互の罪科ととかりにかけて貰ふ氣だが夫でも何處迄つゝ張心うとよあしあつていふ復市思案の思入有て(復)こいつア一番玄く玄つたさう言ふ仕込があふふとい此方の夢も自化でやつて來たのを此方もまた天窓と押へる氣で有ふ併相人が素人なら逆みぢにでもやつて退るがこなも鯨と異名の兄己も今トやア氣まトめ屋敷奉公して居るが元上州の信濃路でいちつとい顔も知られた復市人の當つて碎ると長い短いふのの野暮身の垢ぬけぬ互ひ

の証據如何も奇麗に小次郎の己が腹で呑込で見つぬ振も仕て遣うが己も夜更も爰迄来て何ぞぼろが切れぬ逆指とくへちやア引込れねへこなたの顔も立てやるから其替りもやア此己に不性代呂とバ五十兩四の五のさしに出して下せへ(三)ふ、そんなら今夜の一掃を見のかすといふ其過料か(復)五十兩といひ出したも道樂者の腹と賣て諸色下落の時節だからよつねと安く負た積りだ(三)如何も五十兩の承知した(復)そんならこんど心得心して(三)五十兩の合点だごなれたも只の者じやアなし道樂者の懐る故どうの翌日の夕方まで屹度揃へて渡さうから夫迄待ちや呉めへか(復)い、いこなたも腹を賣る氣さらおれも奇麗に言草なし翌日の晩まで待つてやるから其時否哉の有るめへの(三)何の附も己も三太だ判証文のさすくてもいつた詞の千枚起証安心として歸つてくりやれ(復)ふ、ふ、いふも奇麗にいふからいよもや間違ふ事毛有まいそれじやア今夜の何事なく素直に歸るが約束の時刻が仮令半時でも間違つた其時よの未練のさしが承知だろふの(三)其念よの及ばぬ事貧乏しても鯨の三太ご尾ひれのさつかり附て居る(復)夫々やア翌日の夕方迄に(三)氣の毒ながら己が内迄(復)其時をべよく行

けと重疊(三)モ間違たら三太が首を(復)そんなら三太(三)小柴の復市(復)必ず詞をつかふたぞよと「約と言葉よとげ持小柴おのが工の裏家をバ勇々としてと花道の附際迄行と下手より以前の下部出て○復市首尾の(復)コレと押へて一寸呷く是よて下部の又元の下手へ小隠とする「立歸ると復市をなしあつて向へ道入るこそより三太の五十兩の金も心配する後より以前の文子小次郎お千代の三人出て文子と二年百兩も常盤樓へ賣しとのせりふありてト文子の常盤樓へ行く愛と喜び一ツの段切こへ以前の仲間三太の煙草入とらんと飛出す(三)こいつア油斷がト思入あつてならねへわいとこの見ゆるしく柏子幕

○七幕目 常盤樓の場 造物平舞臺真中一間の入口此柱は常盤樓と記せし行燈をかけ内も同じく常盤としさる紺のきんをかけ都て遊女屋表かゝりの体爰も前幕の船田新七大江幸七初織大小の拵よて立かゝり居るとお初お千代仲居の拵へ喜八若者の拵よて留て居る此見得名古屋名物の唄よて幕明くと船田新七大江幸七の二人の今日突出しの絨吉といふ遊者を是非身の座敷へ呼べといふと呼べぬといふより仲居若者と捕へ立腹

して去んとする筋となりへト仲居若者止られて奥へ入る筋にて道具かゝると見附  
 上の方帳簞笥の書割此次延喜棚是より下手中障子の襖上下折廻りの障子家体都て遊女  
 屋家長居間の模様爰は家長五助着流し遊女屋亭主の拵へよて煙草と香居る下手に以前  
 の仲居此見得よて太鼓地の相方よて道具納ると仲居のお千代船田新七が藝者綾吉を  
 座敷へ出せとやのまじきよしを家長にいひ綾吉を呼ばんと奥へ行く跡よて五助思入あ  
 つて(五)夫よして一昨日手代の清六が抱て戻つたアノ綾吉標致なら風俗なら何所よ  
 一ツ言分のない堀出し者其上行義の正しき何でも身柄の好さう果と思ふて居るが  
 いつたぬどふいふ素性トや知ふんとして是と浮た唄より奥より綾吉好まの藩妓の拵よ  
 て出て来り(綾)旦那様何ぞ御用でござりまする(五)扱用といふて外でいなければと縁  
 有て己が内へ抱へたおぬし一昨日の今日といふていぬんまり早ひと思ふか知らねと何  
 と皮切よ勤ていくれまいか(綾)夫のモツ貴卿様の仰しやる通りケ様よお世話預るの  
 らにいづれ出ねばならぬお座敷さうしてお客の武家衆り但し町人衆でござりまする  
 か(五)イヤ客の武家衆で然も領主の御家中方(綾)エさうして其名を御存じてござりま

する(五)知らいでさらふり馴染の客人船田新七大江幸七松田文吾様と仰しやるお方  
 じや(綾)エそんならアノ船田大江の(五)コレおぬしの馴染か(綾)イヤエさうでいおさ  
 りませぬと武家方でいども坐敷へ(五)何でねしの出られぬのトや(綾)夫の明て  
 の申されませぬと(五)ハテナと此時奥よて仲居のお梅アイノ今其處へ行いナアと  
 是と浮た唄より奥より梅仲居の拵にて出で来り(梅)チ、旦那さん愛よでござりま  
 したのさうして私しへ御用とわへ(五)チ、お梅加用といふの外でもない愛よ居る此女  
 ぢや綾吉といふ名前がけの夕郎いふて置たれとまゝ近附にせぬ故に一寸紹介して置ふ  
 と思ふて(梅)チ、そんならお前の綾吉さんでござんしたか私しの仲居れ梅とて愛の内  
 の厄介ものども此後お心る安ふ(綾)夫の此方より願ふ事まゝ初勤でおさりまする  
 何卒よろしう引まわしを(梅)チヤマア大層な堅事と思はず顔と見てやれ前(綾)あ  
 なたの(兩人)思ひがけあい(五)ね梅貴様の此子と知つて居るか(梅)エ(綾)イヤ、エ終に  
 見た事も逢ふた事もあいあなた(五)ハテねしよ問ふて居ぬのじやわい(綾)夫でも  
 見知らぬお梅さんとやら必ずいふて下さりませるなサア言に言れぬ譯有て今此淺間敷

姿となりし此綾吉知らぬ者でござりませうが(梅)成程知らぬ綾吉さん一たがどうし  
 た譯じややら知らぬ事としてチモマア不思議な(五)そんならお梅おぬしの愈々(梅)ハイ  
 とんと見た事のないれ子さんでござんすわいなア(五)何ごり味な工合ごなアと是と踊  
 り地にあり奥より以前の初ね千代出で来り又々綾吉と新七幸七が呼ぶよし五助にせ  
 まれば五助の綾吉が座敷へ出ぬと兎角進めて坐敷へやる跡合方にて五助お梅の手を取  
 つて上手に直し(五)改め申でござりませぬと元私しめの貴卿の親御寺内親則様に御  
 奉公と致しましたる子飼からの歩仲間まごお屋敷にね勤なされてござつた時分預け  
 申た給金のたくとへ持てね暇願ひ賤しい家業でござりますれと茶家商賣とはドめてよ  
 り迎に叶ふて只今で抱への子供も多く持何不自由なく暮しやすするも元といへば且  
 那様の御門弟衆の御遺負より昔の御恩が送りたいと思ふ内忘ませぬ正月の十五日年頭  
 のね禮がてられ尋申に参つた途中御城下での非業な御最期其場に斗らす行合で拾て戻  
 つた証據の一品モシ一寸待て下さりませと帳簿等より小柄を取り出し此小柄でござり  
 ますが御領主様の定紋附何んでも早ふお知らせ申し及ずながら御恩の爲お助太刀とも

致度貴卿のお行衛探る内門へおさつたお六部姿ヤン嬉しやと此如く名ともお梅と呼替  
 て賤しい仲居とさせまするも浮世と忍ぶ詮義の抜道かやと御苦勞なさるれと今に御本  
 意お迷なさらぬお心根とお察し申せば無御無念におざりませう(梅)やんに縁の不思議  
 なもの父上最期の其砌斗らす其方行合かゝる証據の手に入りしもおすさきされし父  
 那様の道引でうあめらふといのう(五)夫と思へ心猶更にお痛敷の日那様(梅)何罪科も  
 さい者と如何に領主の高氣とて(五)お手討とい無慈悲の殿様(梅)飯令如何程討難敵  
 なりとも恨その一心(五)石に立失もあつたため(梅)今に予思ひ(兩人)知らさで置ふ  
 と兩人よろしく思入此以前奥より船田新七出かゝり様子伺ひ居て(新)扱の妙子此家  
 に居たかとツカ〜と下手へ行とお梅火著と取て手裏剣と打此火著新七の首筋に立苦  
 痛のおさしあつておつたり落入る此以前前幕の松田文吾上手の障子家体より伺ひ居て  
 此時障子と立切るお梅さつとな(梅)油断のなぬ(五)イヤ此生酔のお梅暫く(梅)エ  
 (五)爰にお寐かしてと着たるたんせんと脱で死骸にかけ申がよいといと此模様よろし  
 く吉原雀の唄にて返し。造物平舞臺櫺形欄間見附上の方一間の床の間是より下手一面

の障子上下折廻り中障子の襖都て二階坐敷の模様爰に綾吉お初千代居て賑かなる合方にて道具納ると幸七の綾吉ととらへ宮津左京の娘お尋ものゝ女子なりと立かゝる中へ松田文吾と仲居お梅が中藏に這入つて二人りと引別綾吉と幸七と上下へとけて送りやりし跡にて文吾あたりと見廻し思入あつて(文)お梅とやら何と心に随ふまいか(梅)夫りや綾吉さんでおざんとか(文)イ、ヤそモトに(梅)スリヤ此様お不標致ものに(文)イヤ美目の死もわれ心に惚(梅)エ何と言しやんす(文)鷹野の夜と(梅)覺へて居るか(梅)ヤ(文)暗よもよもや見忘れのせまぬがなと急度いう是と詠への合方になり然も其日の國の守都提の鷹狩に杉山宮内が梅林乃間にまざれし女の六部(梅)成程夫で思出す目さ(梅)敵を狙ひ一此身一人りと思ひしに忍び頭巾の黒出立怪しい風の武士一人に(文)心よこめし六發の玉の緒断んと着向し(梅)筒乃手元狂いねと曲者ありこの一言相人替りし炮殺の(梅)的を違へし手違より(文)跡とくらまは鳥羽玉の(梅)闇の夜なから覺める(文)六部變て妓樓の仲居(梅)其夜の武家のお客と(文)神ならぬ身の思ひさや(梅)誠にお不思議(文)出逢おやな(梅)そんなら惚れたといとしやんその(文)領主

と敵と現うからに言すと知れた寺内妙子(梅)エ(文)サ其心底は惚振しも我とて太義のある身故色氣放れて契りたれ(梅)成程其夜の事を思へば大望の有る貴卿とい言でも知れし事ながら素性と聞た其上にて品によつさらお心に随がぬでもなけれども油断のなまぬ身の上あれば(文)何様丈夫と増りたるお手前ならば左も有んが身も心底と聞く迄に迂活と素性の明され(梅)シテ又貴卿の御住所(文)當時領主の家老藤若松三左衛門方の食客(文)其客人が殿と現うも(文)仲居のお身が領主を狙ふも(梅)心の底の明さね(文)互に頼と頼する(梅)願ある身の力より(文)帯紐解た其上よ(梅)名をも素性も打明し(文)積るとおしし雪の夜の(梅)今宵人目のあき折に(文)まづ夫までの仲居のお梅(梅)お客さん(文)碎ておんぞ(梅)ハイト三味せんと取り彈ませうういナアとお梅三味線の調子と合と此模様よろしく踊地にて返し。造物平舞臺一面に雪持の黒堀此上三間の二階見附交張の唐紙前側障子上下見越の梅松黒塀の真中三尺の開戸都て常盤櫻裏手の模様右の鳴物にて道具納ると二階の内に獨吟地唄の雪になる「花も雪も拂へば清き袂かなやんに昔の昔の事よと此内空より雪とふらす向ふより前幕の三太好

の着附目くらト申腹掛股引高下駄とはら番傘とさし出て来り思入あつて(三)ア、淨世  
 といふものによくいつたものだなア己も伯母の達者な時より宮津様の名をかたつて隨  
 分巾も利したが非業に死た其後のさらりと心の角も折れせめて伯母への恩報と  
 かくまい申たる文子様も愛勤其お影よて小次郎様の腦も大きき薄らいたれど文子様  
 又逢そらにも人目と忍ぶ御身分故駕でお連申たがあの駕屋めいどふしやアかつたし  
 ん「我待人も我と待けん駕雲のどとの物思羽のト此内三太駕屋と尋るこなしよて舞  
 臺へ来る能程よ駕屋橋掛りより垂駕と擔ぎ出で来てせりふあつて駕と置き元の橋掛り  
 へ這入る「氷るふとまよ泣言も嘸なと此唄よて前幕の杉山宮内着流し道行ぶり一本差  
 し高下駄とはき濫蛇の目の傘と着て出て来り三太を見てうなづき(宮)其所お居るのハ  
 三太老やないか(三)ナ、伯父貴か(宮)エ、爰な人であしめがと刀と抜き三太の肩先へ  
 切附る三太苦しなながら其手とどろへ(三)マア待てくんあせへ(宮)エ、やうましいとい  
 い「つらき命の惜しうらねども戀しき人の罪ふりくと兩人立まわり宮内三太の脇腹へ  
 刀と突込三太苦痛のみなしめめて(三)譯もいはずよ三太とを何科あつて殺すのだこな

たハ氣でも違ひたり(宮)エ、ぬりしれるなとこれより前幕よ文子と盗としより常盤樓  
 へ賣たる三太の身の上とさんぐせめる處へ駕の内より青山小次郎黒堀の開きより文  
 子の綾吉が出て(小次)三太どの罪もなく我々共よ(文)大の恩人(宮)エ、(兩人)早  
 まりた事仕て下されましたナア(三)アイやね二人り必し後悔んで下さりまするな飯令  
 私仕業でなくとも是迄性根が悪き故伯父も三太の仕た事と思ひ違も悪事の報ひ(宮)  
 何といふ(三)伯父さん今日の三太ハ鬼じやアねへわへと竹笛入の合方よなり前幕の  
 筋を物語りする(宮)エ、其目の覺めより遅ひわい去年よ心が付てくれたら伯父も此誤  
 りあるまぬもの了聞して呉堪忍してくれ飛んだ籠想としてのけたといと此時切戸の内  
 より五助出て来り(五)イヤ綾吉おぬーよハ暇とやる(宮)エそふいふこそさ(綾)親方  
 さん(三)暇とやる(五)サア武家の坐敷が勤らねわわめて益かい奉公人はともつて  
 戻つてくれと年季証文と出して渡と綾吉開き見て(綾)ヤアされバ私しの年季証文(五)  
 サア今も庭うら様子と聞々ハ疊の上の往生が叶ハぬ程の悪黨さへ心と盡す義理合と思  
 へバ見えて見ぬ顔をまても居られず此五助の主人がお世話よなつ返禮よ(綾)そふして

あこの(皆々)主人といふ(五)元のお上のお抱へ儒者よて寺内親則といふお人サ(綾)スリヤ父上とい親き中の(小次)當時お尋もの(宮)妙子どの(皆々)親よ仕へし(五)アモシと此内五助他聞と氣遣ひあざりと伺う頃の切れよ二階の障子と引抜き文吾お梅三味せんと持弾仕舞しあさし(文吾)スリヤ此家のあるお五助よ(梅)元此身の家来筋とまれより二階下五人うみし渡りせりふにて柏子幕

○八幕目 梁瀬堤庚申堂の場 宮津左京屋敷の場 造物平舞臺上手に土橋此向ふよ用水の樋の口是は續き草土堤の張物土橋の傍よ古き梵天杯立わり真中よわらふき家根狐格子本縁附軒口よ庚申塚と印したる古びたる額をうけたる苦むしたる辻堂下手よ破きたる雨覆ひのある石の手水鉢都て梁瀬堤庚申堂の体時の鐘禪の勤よて幕明くと百性二人寺戻りの渡りせりふよて上下へ這入る跡床の淨るり「春といふ聲の晴るゝの意味なれど空の墨なす雨催ひ身の愛と知る小夜風の身よ染むれ房の花若の末と頼と思ふ身の今宵散とも神ならそ佛詣の戻り道梁瀬堤よさしかると前話れ幕お房好の世話女房の形よて花若の手を引出て來り(房)今日先殿様の御命日のお待夜なり又二ツよん兄

親晴様の其夜よりお行衛の知れぬといふのまさしく此世よ亡き人とお成なされし違ひない故夫をば兼て御菩提所蓬萊寺様へ人目を忍びお参り申て御回向よツイひまよて思ひすもいりふ戻りり遅ふなつた夫よマア一寸先も見ぬやうじやわいナア(花)噴様眠とふ成て來た(房)チ、尤トや〜今花緒の切きた故これを直して行ふわいナア(花)ア〜「アイ〜」も愛らしき子の手を引て立上る折しも扉を内より明け伺ひ出たる一人りの曲者お房の跡とすかし見て黙頭ながら拔足差足一刀引き抜後より物ともいわず切り附ればお房のワット玉さる聲花若胸りおろ〜聲とお房の子役の手と取り立上る此時前幕の小柴復市黒紋附の一ツ着大小尻りうげ細の手拭よて頬冠りなし出てお房の跡と伺ひ一刀と引き抜き後ら袈裟よ切附る是よてワット例れるか〜襟剛ひわいのふ〜(房)ヤア何奴なればりよわい女子と聲とモウけす斬りけしハコリヤ物どりの仕業おやなアと苦痛のこあしよていふ此内復市の辻堂の本縁へ腰よかけ刀と前へ突立ちこあしあつて(復)身共の盗人追とさ杯と左様お卑しい者でないわい(房)物取りてないこあさ何故罪もむくいもない此身を手よりけたるぞ(復)スリヤア只の女な何で



殺せるもの以前に大殿大領様の思もの愛妾お房今トヤア百性長兵衛が娘と下つゝ  
 お房がふけふ寺参りよ來事と知つて歸りと待受て庚申堂の此内忍んで居たとり  
 ら猿こなる人も聞さるいわさるの淋しい場所がまつちの附目とまれより復市の煩髪を  
 抜ながら若松の工とてお房を開してトいお房の止をさして尙花若の守袋ととらんとす  
 るとき小林蓬萊茶寺の壽海禪師來て花若の壽海禪師が助け守袋の燕が拾ふて復市の  
 ツト花道へのゆる三人からみし立まどりよて返し。造物平舞臺通しの欄間舞臺真中へ  
 隔を入れ上手の塗骨の障子建切あり下手の方の杉戸にて好の所鉄網行燈の前白洲火  
 鉢と置きおとくおみつおかめの三人火鉢にとりつき居る此見得合方時計の音よて道具  
 納るとおとくおみつおかめの三人の左京の閉門の鷹をいろくいふて上下へ別を  
 ぶ跡あつゝへの獨吟となり上手の障子の内より前幕の小次郎待女に艶髪と撫附て貫ひ  
 あがら其身の上や兄の事杯語るこの内れ艶髪始終小次郎と思ひを運ぶ思入あつてこ  
 れと獨吟の合方よからみトいれ艶髪小次郎と女夫の約束と結筋よて道具かどると造物  
 真中三間中高の二重本榎附丸木の椽づり大和ぶきの本庇風雅なる欄間二重の見附上手

三尺の床の間是に一体の語と書る細物の軸をかけ此前よ香爐臺よ香爐と置き掛花生  
 よ木蓮の花よさし都て宮津邸敷放坐敷の模様二重少し上手より小なる好の机を直し  
 櫛の上に宮津左京長髪のうづら好の着附袴の袴よて書見として居る此傍よ刀掛桑の書  
 見行燈よとも一布團附のまう爐を置き机の上よ本と如意と置きあり都て禪室様なる風  
 雅の坐敷の体よつとりと一なる合方よて道具納ると左京書見終りしこきよて出笛の  
 入り合方よなり(左)當今我日本今日のありさま勤王佐幕と各藩議論二ツ派よ別れ互  
 よ其威を争ひ一も邪の正よ激せぬ本文勤王黨次第に勝を占め佐幕至然に勢ひと失  
 ひ今日の谷藩ともマノ方向と一定し兵を出し糧とさげ競ふて王事よ勤むるその中よ  
 獨り我藩の三主君の聰明にとさらせ王ひ臣士よ賢良の者多く大義名分のある處を辨  
 へ皆王事よ心をよそれども一人權臣若松三左衛門幕論の爲にあやまられ是よ加膽をそ  
 もの數多あるより一藩の人心猶二ツよ別れ一意王よ勤むる事わたるよ遺感なれ  
 斯て有る内萬が一朝廷より罷責あらば夫を我藩の一大事なり何卒藩士の心と正義よ一  
 致させんものといそかよ主君と心を合せ罪なぬ罪と罪とし態と閉門謹慎の身となつ

て他黨の人々と説論なせども若松が偽説の之信する者厚ふして或は彼と利欲をととも  
し大義名分のある所を悟らず夫々若松三左衛門才智武藝に至る迄一番無双の俊傑なれ  
ども惜らくの悪奸よて主家を押領なさん爲る我奸謀の妨となるものは是を退け彼又組  
する者を愛しあわれといふも愚かかれいり致して彼黨の心正しくひるかへさせ和順  
になしぬさまのアよき策畧もあらざるものう心苦しき事ともじやあアとよろしく歎息  
の思入此以前下手板塀の切戸と内よりそつと開き前幕の松田文吾着附袴の高股立着附  
とぬきりけ縹緋へりしく下結たすさをあやどり振足にて下手も伺ひ居て此時時分の  
よしといふ思入にて刀を引抜二重下手の踏脱より下手の障子をそつと明け白刃と引さ  
けた儘二重へ上り左京の後へまわり白刃を上段よりまへ隙と狙ひ居る左京の前の塗机  
に怪しき姿の寫るよ一寸後と見る此途成文吾の無言にて切附る左京心得へ身と開きて  
机の上ある如意をとつて身かまへる文吾の仕損せしといふ思入にてせき込んで又切り  
りける是を一寸立廻つて左京文吾を突廻してよろめく所を如意にて足と拂らふ是にて  
文吾の平舞臺へ飛より又前より切てりける如意にて受とめ其儘兩人とも平舞臺へ入り

てとけしき立廻りになりト左京の文吾の白刃を如意にて打落す文吾のわいて落たる  
白刃と取ふとする左京手早く文吾の裾をかく是にて文吾へたるを如意にて首筋を押  
へ附け急度こなしわつて文吾の顔をすうし見て(左)ヤ、其方こそ兼てより若松方に食  
容おと松田文吾と申やつと文吾押附られなつら(文)如何にも松田文吾でござる左京  
ム、扱ひ夜陰に我邸へ密に忍入つるの三左衛門の差圖にならひ刺客なさんづ結構よ  
奇コリヤよつく承れ斯く申某の勤王の心を厚ふし今危急存亡の時に至り朝乃御爲  
主君の爲容易に捨べき命にあらす若松如きが悪手の爲に其計策に落入らんや愚かな事  
と手並にこりす此上手向ひなさん所有よか(文)アイヤ全く左にあらせと扱たる一刀  
を左京の前へ投出し期向刀まで差出し申上度一義ありまづくしばらぐ宮津氏(左)ム  
、心得ざる詞なれども左迄に申と聞ざるも武士の本意に背くの道理申すあらば得々申  
せトいどもトや(文)ハ、ハア一旦敵せし某が斯く斗り申て御了解もあつたトさがい  
とで止なんト通りお聞きされて下りませふとこれを詭の相方になり某の幕府の臣  
にて松田文左衛門と申者の倅なるが元より君へ忠勤の相はげと既も本年正月三日とよ

れより序幕の身の筋と語り(文)一旦の恩義も遁るゝ道なくして悪と知つて悪と助け今宵も彼等の差圖を受け貴殿と暗殺なさんすと忍び入りしも全くの我誠心と御身に明し誠忠無二の其許がお家に仇なす肝賊共をしいしめさるゝ一助とも成らんものと参りし文吾一旦刃を向けたる不届何卒見ゆるし下さるやう偏に願ひ奉る(左)ム、善悪ともに武士が一旦の義を約せし上り其悪人に随ふの丈夫ある魂なるが家と狙ふ奸賊としいす一助とならんとい何ともつて助る所存(文)夫こそ文吾が今宵の土産(左)シテこの品(文)それ若松三左衛門が徒黨と集る連判状(左)ナ、さんとト合方さつたりとある左京の手早く一巻を開く此内文吾の前に置きし小刀とつて引抜腹へ突立る左京の驚き(左)や、文吾どのの何故の生害なるぞ(文)其御不審御尤只今拙者が切腹なすの其連判の初筆なる若松氏の恩義と捨訴人おしたる則ちいひとけ(左)ム、スリヤ一旦の恩義の恩義一度の悪事よ力と添へ再び誠義とあらして死と以て訴人なせしう天晴武士の大丈夫御身返令此世を去る共此土産の一巻と以て奸賊共と平けおの當家の万代不益の基君にも無かし御満足(文)ハ、ッ其お詞と聞上の此世も思ひ置事なしお居間とけかす

の恐れあれども其土産と功となし憚りながら御介借とい(左)ム、左迄覺悟の上からの苦痛とさするも無慈悲に似たり(文)既に伏見に消へべき命と今日迄長らへしも幕府に縁ある御當家のお役にたつて相果るの願てもない我本望(左)夫で忠臣義心の徳川(文)其お詞が冥土へミやげ(左)當家へ土産の榮へ(文)今宵晴行く西の空(左)といへあさら弓取の(文)其弦切れし松田文吾今そ此世と刀と引廻を左京の文吾の刀ととり上げ(左)依頼よまかせ身共が介借(文)憚りながら(左)ナ、と後へ廻る文吾のくるしさまなしめて(文)早おさらりと手と合せ左京の刀と振上る双方見合せて木の頭左京の不便といふ思入よて顔とそむける其模様合方寺の鐘の送りよてよろしくひやうし幕

○大結 菩提所佛參の場 都川御坐船の場 造物平舞臺真中瓦家根附の門左右筋堀空より松の釣枝都て大寺門前の模様幕の内より紺看板の仲間四人堀に鎗と二本立りたり供待の体禪の勤にて幕明くと皆々拾せりふといひながら門の内へ這入る跡合方よなり向ふより妙子伊達虚無僧の拵へにて天蓋と冠る尺八と持跡より黒四天釋鉢巻の捕人二人見隠に附て出て來り妙子花道にて(妙)別を天外に求むれば蜀山の雲終り隔たり魂を



地下に尋ねれば巴陵の水轉り流れて止まらぬ世の有様を觀ずれば歎くも女の思知事が  
 ら父上非業も世と去りし怨みの刃報んと狙ひし仇の殿ならで老臣若松三左衛門が差圖  
 り依て復市が仕業なる事斗らす常盤樓まで開しより姿を替て附組へ他出の折もあら  
 ざりしよ幸ひ今日の殿の代參本意と送るの今此時と捕人ヤアト十手を振上るを妙子天  
 蓋をあげて急度見返る是もて引返して這入る妙子思入あつて舞臺へ來る此時上手より  
 前幕の小三郎着流志大小深編笠と冠りし拵にて出で來り双方行違思入あつて(小三)寺  
 内妙子待て(妙)我身を寺内妙子とい(小三)お尋者の寺内妙子身が面体と忘し(妙)ヤ  
 そふいふまなたり(小三)いつや杉山宮内が方にて捕送しる小三郎よもや忘れりせ  
 まいがな(妙)シテ又妾に何科あつて(小三)ヤア何科とい思かな一言誓恩と打忘殿と討  
 んと斗りしに必定汝一存にてのよもあらト其詮義とばさせんづと手討と号して我君  
 の内意と蒙ひる小三郎何者に頼まれた真直に白状致せ(妙)アイヤ小三郎どの其殿様を  
 敵と附現し我身の誤り(小三)何と(妙)身の言譯の一通り心を静めて小三郎どのとふ  
 ぞ聞て下さりませと天蓋と取るこれを詔の合方よて前幕の筋を語りト若松三左衛門

に欺ひりれし事の一伍一什を語り今日佛參の御名代に立つ若松と討て親の怨と晴す迄と種々身の上の事と小三郎に告げる段にて道具返し。造物平舞臺見付金襴上下やとり折廻りの金襴大欄間をわろし橋懸り杉戸真中に雨の柳を書きし大衛立後にお房の亡靈の影寫る仕かけあり都て大寺書院の体爰よ若松三左衛門與斗目麻上下の拵よて書院煙草益と扣へて居る上手よ壽海禪師袈裟衣住持の拵よてはつとと持墨衣の所化二人付添て扣へ居る此見得三味せん入の音楽よて道具納ると壽海禪師若松三左衛門に代參の挨拶よとせりふありて所化と連れて奥へ這入跡へ小林薫前幕乃拵よて出て來り若松三左衛門よ合て身の上を語り切腹せんと云長物語の處へ前幕の復市與斗目麻上下士分の拵にて酒よ酔たまなしよて此處へ來りお房の亡靈の爲よ身の惡事より若松の工をとならべ立、若松の爲よ繼殺さる始終の様子と妙小三郎の三人が見て既よ跡追うけて討んとする處へ壽海禪師の花若と連れて立出て三人よとめて説諭なす此模様よろしく淺黄幕を冠せ切つて落すと造物舞臺一とい朱塗の御坐船紫の幕都て御坐船川施餓鬼の摸樣船の内に以前の諸士八人真中よ前幕の大江山七やはり麻上下の拵よて居る此見得浪

の音合方施餓鬼の鳴物よて道具納る(幸)各々方々に今日御佛參御苦勞千万シテ御家老若松三左衛門どのに(藤)御家老よも小船よ打乗我々同道(皆々)致してござる(幸)夫で幸ひ能折柄兼て申合せし通り某殿よ酒よすゝめ置されバ此圖よとづさず打てとりなバ(傳)シテ殿よ(皆)いづれに(幸)あれなる機のお幕の内に只一人と皆々藩主と討せりふありて上手へ這入此時後よ本鉄炮の音よて正面の障子をわけ三左衛門以前の拵へ肩衣よとね短筒よ持出て來り(三)若松三左衛門が大望成就の時至れりアラ嬉しや悦しやなアと此時螺貝遠寄と打つ三左衛門合点の行ぬこあしあつて(三)ハテ心得ぬ俄お聞ゆる貝鐘太鼓(藤)汝を取巻合圖の手配り(三)なんと此時後よて(藩)ヤアく賊臣三左衛門へ大領重信(左)宮津左京(薫)小林薫(藩)申聞と子細あり(左)其所一寸も(三人)動くまい(三)何んと急度見得是よ一ッせいうけり浪の音よて皆々出來り(藩)ヤア愚なり三左衛門予が詞をよく承れとこれより三左衛門の舊惡をせめる此時上手の苦ととねのけ爰よ妙子長刀よ持下手の船の苦ととねのけ爰に小三郎肌ぬぎ釋かけの拵よて鎗と拵居て(妙)ヤア比與未練の三左衛門汝が爲よ父と討られし寺内妙子(小三)青山小三

郎(小次)弟小次郎是あり(妙)通れるものなり(三人)遁て見よ(三)扱ひ汝等いつの程  
 みや(藩)斯く八方へ手配なせし上から(左)最早籠中の鳥同前(藩)罪は伏して細か  
 る(三)サア夫(妙)立上つて勝負しやる(三)サア夫(藩)予が手よりけんや(三)サア  
 (皆)サア(藩)若松三左衛門(皆)罪は伏せ(三)モウ是迄と刀と抜き脇腹へ突立  
 る皆々見て(左)流石(若松)三左衛門切腹といよいよ覺悟(藩)賊臣亡上り(左)御家  
 の長久(皆)萬代不易と爰へ幸七抜刀みて伺ひ出で來り(幸)うぬと藩主切てかゝると  
 一寸立まはつて幸七の脇腹を鎗みて貫く(藩)目出度いと幸七を返して鎗と突のが木の  
 頭目出度くとひやうし幕大入叶

一度り二度り三味線の  
 よごき一皮も降雪の  
 御ヒイキ積るお進み

取りあへず

切狂言 安達原三段目

右切狂言の筋書の諸君よく御存候得ば只蛇足ととびき役割のま左に

- |        |       |
|--------|-------|
| 娘 袖 萩  | 宗 十 郎 |
| 安部 宗 任 | 璃 寛   |
| 八幡 太 郎 | 橘 三 郎 |
| 親 謙 杖  | 荒 五 郎 |
| 娘 敷 妙  | み ん し |
| 安部 貞 任 | 延 若   |

### 溜飲下シ丸

即効 奇劑 定價 一服入三錢 三服入七錢 七服箱入十五錢 十四服箱入二十八錢

功効 第一のりういんよて  
○胸痛 ○氣分鬱 ○吐水出 ○不消化 ○腹はり  
○胸悪 ○嘔氣と催し ○苦き水と吐 ○胸やけ  
○暖氣出 ○常より不便不通ト症より用て大よ  
し ○餘の包紙より記すと以て零す

### 金精丹

定價 十五錠入金三錢 三十錠入金五錢

主治 ○第一鬱氣とばらし ○酒の匂ひとさ  
り ○むねとすかし ○腸胃と健よし ○酒の二  
日酔よし ○口中を清らかよし ○頭痛と  
さめ ○たんせきをとめ ○音聲を爽よし ○旅  
行又ハ瀛車或ハ蒸氣船及び遊船より乗るとき  
も必ず用意仕玉へ右金精丹の前より記す處の

功効より男女とも平常懐中  
して人中へ出るときに怠らず二  
三錠と服用すべし尤も群集する  
場所の諸のあしきまはひあり是とよける等  
お頗る妙されバ常所持して服用すれば忽  
ち偉功ある事神の如し ○但懐中仕易き様美  
麗の包紙より改正し至極輕便仕立有之候間  
不相替御愛顧と乞



健胃 藥王 ペルズ 定價 小罐金十錢 中罐金廿錢 大罐金四十錢  
主治 ○胃弱 ○溜飲 ○胸痛 ○胸痞 ○腹滿  
○嘔吐 ○瘴氣 ○食傷 ○鬱症 ○香酸肩擊  
委敷の包紙より記すと以て愛お零す  
大坂内淡路町松屋町東

三本舖 吉田宗三郎製  
元發賣 心齋橋北 駸々堂  
諸北入

宇田川文海校正 旭亭芳峯書

### 勤王巷説 一葉松

前後貳冊 定價五十錢

全國郵送料十四錢  
此書は維新の際或一諸侯の藩士が勤王佐幕  
の二黨に分れ互ハ吾黨の主義と貫むとして  
智と闘し勇と競べ佐幕黨一時勢力と逞ふせ  
しも邪は正を勝す遂ハ勤王黨が勝を制した  
る顛末を最白面く綴たる繪入草紙なれば陸  
續御愛購を冀ふ

宇田川文海校正 繪入全一冊讀切

### 實錄小芝廼山風

定價 卅五錢

全國郵稅八錢  
此書は近日朝日新聞紙上ハ陸續記載せしを  
其まゝ寫册讀切の美々敷草雙紙製し本日  
發兌致候間御愛玩奉希上候  
大阪心齋橋北詰十五番地 駸々堂

○本誌廣告料 一行ニ付 金 七 錢

○本誌毎月二回發行

○本誌代價ハ前金収受の上配達す

○郵便爲換金驛店へ御送附の節ハ大阪島之  
と雖も到底受授の確實と早着を希望す  
○右爲換其他送金不便の地ハ郵便切手代用  
と諾す

明治十七年一月十一日御届  
明治十七年三月廿一日出版

京都府平民 正價拾五錢

編輯兼出版人 上田捨吉

大阪南區末吉橋通三丁目十五番地  
大阪心齋橋北詰十五番地

發兌所 駸々堂

賣捌 京都寺町通御池下 駸々堂書店  
大阪八幡筋 玉置清七  
同 備後町 岡島支店

